

琉球大学学術リポジトリ

伊波普猷文庫蔵『琉歌集 春の部』 一解説と翻刻一

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2011-06-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 前城, 淳子, Maeshiro, Junko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20354

伊波普猷文庫蔵『琉歌集 春の部』—解説と翻刻—

前 城 淳 子

琉球大学附属図書館の伊波普猷文庫には二三の琉歌集が所蔵されており、その中に『南苑八景』、『古今琉歌集』、『琉歌集 春の部』などの部立本琉歌集が含まれている。

今回紹介する『琉歌集 春の部』（公開番号72）は、伊波文庫の目録では『琉歌集 冬の部』とともに一つの歌集として扱われているが、この二つはそれぞれ別の歌集である。表紙や奥書等がないため、冒頭の「春の部」をとって歌集の名称を「琉歌集 春の部」としているが、収録された琉歌は春の歌のみではない。本歌集は春の部、夏の部、秋の部、冬の部、恋の部、雑の部の六つの部立からなり、全部で一〇八八首の琉歌を収録している。収録されている歌がすべて『古今琉歌集』と重なることや、作者名の誤写が『古今琉歌集』の初版でもそのままになっている³など、『古今琉歌集』の編纂過程で作られたものと推測される。

『古今琉歌集』とその系統の琉歌集

小那覇朝親編『古今琉歌集 上巻』は明治二八（一八九五）年に刊行される。春、夏、秋、冬、恋、仲風、雑の七つの部立からなり、一七〇〇首の琉歌を収録している。凡例によつて、故小橋川朝昇大人の編輯した歌集に基づきその他の歌集を参考にして編まれたものであること、節組は故野村安趙の撰によるものであることが分かる。部立による琉歌集の刊行は『古今琉歌集』が最初であり、その編纂にあたっては同じく部立本琉歌集である小橋川朝

昇の『琉球大歌集』を参考にしたということであろう。『古今琉歌集』は小橋川朝昇が編纂した『琉球大歌集』と部立や各部立内部の歌の配列などが異なっており、『琉球大歌集』をそのまま踏襲したものではない。

書名を『古今琉歌集 上巻』としているのは、下巻の刊行を当初から意図していたためであろう。明治三四（一九〇二）年九月一五日付『琉球新報』には「琉歌集下巻につき」と題した狂歌やつらねなどの作品を募る記事とともに、次の広告が掲載されている。

琉歌集下巻 近日刊
行致候

其目錄左の如し

一 上巻拾遺

一 各節本歌

一 長歌

一 つらね

一 くゑな

一 狂歌

一 口説

一 俗謡

一 作田節囃

一 組躍（二童敵討、執心鐘入、銘苅子、義臣物語、手水の縁、忠臣身替）の六種

右目下編輯中に候処狂歌の如きは多く口に伝へられたるものにて候故遺漏多かるへしと被在候間御秘蔵の狂歌集又は御記憶に有するの作付これあり候は、弊社編輯局宛にて御割愛被下候は、幸甚敬具

九月十五日 琉球新報社

四方諸君

『古今琉歌集 下巻』は、各節本歌や狂歌、口説、つらね、くゑな、組踊などを取り上げ、小橋川の『琉球大歌集』の形に近づいていることが分かる。『古今琉歌集 下巻』は刊行されずに終わるが、『古今琉歌集』が示した琉歌集の形は、真境名安興らが編纂した『琉歌大観』へ引き継がれていくことになる。

小那覇の『古今琉歌集 上巻』はその後、明治四四（一九二二）年に富川盛陸編『古今琉歌集 再版』、昭和二（一九二七）年に大城彦五郎編『古今琉歌集』、そして昭和三一（一九五六）年には比嘉寿助編『古今琉歌集』として刊行される。編集者名は異なるが、これらはいずれも『古今琉歌集 上巻』の再版本である。

大正七（一九一八）年に刊行された大城松吉編『新撰琉歌集』は春、夏、秋、冬、恋、仲風、遊女を読める琉歌、雑、の八つの部立構成からなる。収録歌数は一一三首。遊女を読める琉歌（二〇九首）以外はすべて『古今琉歌集』所収歌と重複している。『古今琉歌集』から抄録した部分にあらたに遊女の歌を加えたものであろう。

伊波文庫の『琉歌集』（公開番号68）、『琉歌集（真境名笑古写）』（公開番号58）の二つの歌集は、それぞれ二九首、二三八首の琉歌を収録している。部立は示されていないが収録されている歌がすべて『古今琉歌集』と重複していること、歌の配列が『古今琉歌集』とほぼ同じであることから、『古今琉歌集』からの抄録本であると思われる。

この他『古今琉歌集』と近い歌集に天理大学図書館蔵『天理別本 琉歌集』、伊波普猷文庫蔵『琉歌集 冬の部』があげられる。『天理別本 琉歌集』は、収録されている七二九首のすべてが『古今琉歌集』と重複しており、歌の配列順も同じである。『古今琉歌集』にあつて『天理別本 琉歌集』に採られていない九七一首の多くが、各部立の後半部分に収録されている歌である。この歌集が『古今琉歌集』の元本であるのか、『古今琉歌集』からの抄録本であるのかは、今後さらなる検討が必要であらう。

『琉歌集 冬の部』は冬の部下、冬の部上巻、秋の部下、春、賀、恋の部上、春の部下巻、夏の部上巻、秋の部上、夏の部下巻、道歌、夏、恋の部下、春の部上巻の十四に分けられ、九一六首の琉歌を収録している。作者名の記載は見られない。錯簡が多く、今後丁寧に見ていかなくては分からないが、各部立内部の歌の配列はほぼ古今琉歌集と同じである。しかし、古今琉歌集にない歌が三三首採られていること、「春の部上」「春の部下巻」のように各部が上下に分けられているなど、『古今琉歌集』と異なる分類がされている。『天理別本 琉歌集』と同じく、『古今琉歌集』の元本である可能性はあるが、今の段階では不明である。

『琉歌集 春の部』と『古今琉歌集』

『琉歌集 春の部』は部立や歌の配列などから『古今琉歌集』と非常に近い関係にある歌集である。収録歌数は一〇八八首であり、『古今琉歌集』より六一二首少ない。『琉歌集 春の部』に採られていない六一二首のうち、五八九首は『古今琉歌集』で節名が示されている歌と「仲風」の部の歌である。『古今琉歌集』で節名が付されている歌で、『琉歌集 春の部』にも採られているのは329番と330番の二首のみである。一丁表の綴じ代部分に「節組より追入」と記されていること、『古今琉歌集』で節名が付されている歌は『琉歌集 春の部』では二首を除いて採

られていないことから、この『琉歌集 春の部』を元にして節組琉歌集から琉歌を追加し、『古今琉歌集』が編纂されたと推測される。

『古今琉歌集』で節名が付されていないものの『琉歌集 春の部』に採られていない歌は、『古今琉歌集』の2番、12番、13番、15番、21番、27番、30番、234番、309番、363番、437番、476番、521番、1104番、1185番、1209番、1214番、1225番、1358番、1508番、1631番、1667番、1668番の二三首である。このうち、真境名安興らが編纂した『琉歌大観』（台湾大学図書館蔵）の「第十三輯 短歌 読人不知」の「以下古今琉歌集に拠る」として収録された部分を見ると、27番は「こてい節」、30番は「白瀬走川節」、476番は「謝敷節」と節名が記されている。また、521番は349番と、1508番は1492番との重複歌である。

両歌集で重複する歌を見ると、一方でひらがな表記になっていいる部分がある一方では漢字表記になっているなど、歌意に関わらない部分での表記の違いが多いが、それ以外にも次にあげる歌のように、歌の解釈に関わる異同がいくつみられる。

秋の紅葉ゝのにしきより増ていろくの菊のさきやる清さ（春の部・185番）

あきのもみち葉の二色よりまさていろくの菊のさきやるきよらさ（古今・227番）

二句目の「にしき」が『古今琉歌集』では「二色」となっている。この琉歌を『琉歌全集』（1517番）は「たいろ」と表記し「紅と黄の二色」と説明している。春の花、秋の紅葉の色鮮やかなさまは、色とりどりの錦にたとえられる。本来「にしき（錦）」であったものを「古今」が「二色」と表記したために誤って伝えられたものであろう。

「春の部」817番「物のよしあしやにしきさく花の色のことわかちみしてたはうれ」の「にしき」も『古今琉歌集』1285番では「二色」と表記されている。この他に、琉歌で「二色」が用いられている歌は『琉歌全集』（1149番）の「山ごとに秋や紅葉葉の二色雁やいつ着きやが鳴きよ渡る」がある。

次の例も仮名であつたものが漢字で表記されたために異なる解釈がされるようになったものである。四句目「さかん」が『古今琉歌集』では「佐嘉舞」と表記されている。

あやかやいみほしやことふきや八十八になられてもなまのさかん（春の部・711番）

あやかやいみほしやことふきや八十八になられてもなまの佐嘉舞（古今・1105番）

「さかん」は勢いのよいさま、元気なさまの意である。歌は「あやかってみたいものだ、寿は八十八になられても今のように盛んであるのを。」の意である。「さかん」を『古今琉歌集』は「佐嘉舞」と漢字で表記している。これは「さかむ」の仮名であるが、漢字で表記したために『琉歌全集』（1598番）になると「左嘉舞」となり、語釈で「あて字であろう、酒の勢で扇舞でもしたことであろう。」と説明されている。

次の例では、四句目「きじて」が『古今琉歌集』では「きゝて」となっている。

肝迷てさらめ頼まらぬ花は与所の詠めゆす朝夕きじて（春の部・635番）

肝まよてさらめたのまらぬ花は与所のなかめゆす朝夕きゝて（古今・998番）

歌は「心が迷ったのであろうよ、頼みにならない花を他人が眺めることを朝夕禁止するのは」の意であるが、「きょて」と表記されることで「聞いていて」の意に解釈されるようになる。『琉歌全集』(1918番)は「聞きゆて」と表記し、「自分の物にすることはできない花であるが、よその人が眺めていると聞くと、心が迷ってしまつて、おだやかでない気持ちになる」と解釈している。

次の例では、四句目「こきゆん」が『古今琉歌集』で「こしゆん」と表記されている。

留てとめらゝぬ老のしからみも明日や春の浦こきゆんとめは (春の部・194番)

とめてとめらゝぬ老のしからみも明日やはるの浦こしゆんとめは (古今・239番)

「漕ぐ」の意の「クジュン」を『古今琉歌集』は「こしゆん」と表記したのであろう。歌は「留めても留められない老いのしからみも、明日は春の浦を漕ぐと思うと。」の意である。一年の終わりが近づき明日は春となる日の感慨を詠んでいるものである。明日はもう春という季節の中にいることを「春の浦を漕ぐ」と表現している。しかし『古今琉歌集』が「こしゆん」と表記したことで「クシユン」(越す)と理解され、『琉歌全集』(2872番)では「越しゆん」と表記されている。冬の部に採られた歌であることを考えると「春の浦を越す」ではなく「春の浦を漕ぐ」が適当であろう。

『古今琉歌集』は読んで楽しむ歌集として、また歌作の際の手本として多くの人に親しまれてきた。『古今琉歌集』はその後の琉歌集にも大きな影響を与えている。この『古今琉歌集』がどのように編纂され、そして受け継が

れていったのか。『琉歌集 春の部』はその解決のための糸口を与えてくれる。また、『琉歌集 春の部』と『古今琉歌集』の異同について丁寧に見ていくことで、これまでの琉歌の解釈を改める必要もでてくるだろう。

付記

本稿は二〇〇八年～二〇一一年度科学研究費補助金（若手研究（B））の補助を受けて行われた「琉歌集のデータベース化と研究」の研究成果の一部である。

¹ 557番歌「よかてさめ兄弟や親かなし御側我身や与所島のあらの一粒」から雑歌であるが、「雑の部」の見出しが欠落している。

² 清水彰編著『琉歌大成』（沖縄タイムス社 一九九四年）は『琉歌集 春の部』を「部立本『琉歌集』甲本」として採用しているが、所収歌数は一〇八〇首と八首少ない。

³ 『琉歌集 春の部』は248番の作者名を「宮平親方朝綱」、270番と272番の作者名を「瑞慶覧朝綱」としている。『古今琉歌集 上巻』は「宮平親方朝綱」（323番）、「瑞慶覧朝綱」（376番、379番）とし、巻末の正誤表で「良綱」「昌綱」と訂正している。

⁴ 明治三四年九月一五日付『琉球新報』第二面に「琉歌集下巻につき」と題して次の記事が掲載されている。

● 琉歌集下巻につき 広告の通り近々刊行致すべく候 就ては狂歌の如きは輯集甚だ困難に候へは 一首なりとも二首なりとも（可成は作者の姓名及び時代まで附記して）御投与被下度候 つらねの如きも吉本のつらね杯

は人口に膾炙する所にて斯様なものは大抵集り居候へとも尚ほ傑作と認めらるゝものこれあり候は、これ亦御投与被下度候 上巻には尽さゝる所これあり候に付 更に拾遺の項を設け上巻に漏れたる名歌を編纂する積りに□在候へはこれ亦御投与被下度候 但し古人の作に限り候 右特志の諸君に御依頼申□ 琉歌集編纂係謹具

⁵ 小那覇本、富川本、比嘉本の三つについては、比嘉昇・仲程昌徳著「収録文献解題」(『南島歌謡大成Ⅱ 沖縄篇下』角川書店 一九八〇年)に詳しい。

⁶ 『天理別本 琉歌集』を紹介したものに、末次智「天理別本『琉歌集』——天理大学附属図書館所蔵『琉歌集』解説と翻刻——『歌謡——研究と資料——』(『歌謡研究会会誌第七号 一九九八年)がある。

『琉歌集 春の部』の書誌及び翻刻にあたっての凡例

琉球大学附属図書館伊波普猷文庫蔵の『琉歌集 春の部』の簡単な書誌情報は次の通り。

一冊。本文四八枚。縦二七cm×横一九・六cm。四つ目袋綴じ。昭和六三(一九八八)年度に修復が行われている。その「修理報告書」によると、修復前の法量は一〇四二枚が縦二四・五cm×横一七cm、四三〇四八枚が縦二六・五cm×一九cmとなつている。一〇四二枚は芭蕉紙、四三〇四八枚は楮紙。一面一〇〇一三行書き。表題や奥書等は付されていない。

筆写年は不明であるが、「明治二十六年二月」の日付が記された裏紙が表紙と裏表紙の部分に用いられており、明治二六年以降であると推測される。

翻刻にあたって、以下のような方針で行った。

- 一 琉歌に新たに連続歌番号を付した。
- 一 旧漢字は新漢字に改めた。
- 一 本文に付された濁点は原典のままとした。
- 一 琉歌の右肩に作者名が記されていることがあるが、歌の冒頭に示した。910番、911番は歌の末尾に作者名が記されているが、これも歌の冒頭に示した。
- 一 琉歌の異伝を二行書きにしてある場合はその通りに示した。
- 一 明らかな脱字は括弧（ ）に入れて示した。
- 一 汚れや虫食い等で判別できない文字は□で示し、かたわらに括弧（ ）で適当な文字を示した。
- 一 修復前に作成されたコピー版複製本の本文四〇枚目が、修復後の原本では本文五枚目に綴じられている。これは修復の際の錯簡と思われるため、本来の位置（四〇枚目）に戻して翻字を行った。
- 一 下段に重複する『古今琉歌集』の歌番号を示し、歌詞に異なる場合は歌番号の前に*印を付した。ただし、歌意に関わらない表記上の相違は異同とみなさない。

翻刻 『琉歌集 春の部』

春の部

- | | | | |
|----|-----------|--|----|
| 1 | 尚瀬王 | 年やたちかわて初春の空にわかつき出たる松のみとり | 1 |
| 2 | 御同詠 | 山のさらかきに袖やひかるとも匂ひある花やたつねほしやの | 3 |
| 3 | 御同詠 | よの松とともにかかる願ひしゆゝてみとりさしそへる五葉の小まつ | 4 |
| 4 | 尚育王 | むかしから月や秋とてやりいふすか春や花の上にてるか清さ | 5 |
| 5 | 御同詠 | 雪かみて松の春にうち向てみとりさしそへて千代にさかる | 6 |
| 6 | 御同詠 | 常盤なる松のそらに春風のうれしおとつれや千代のひゝき | 7 |
| 7 | 尚泰王 | 馬に鞭かけて暫しむちみほしや霞たつ山の花の <small>□</small> しき <small>㊦</small> | 8 |
| 8 | 御同詠 | 春雨に袖やぬれらはん花のちり飛ぬうちむちてむたな | 9 |
| 9 | 御同詠 | 庭にさく梅の匂ひにひかされて月も山の端にかゝてをゆら | 10 |
| 10 | 久米具志川王子朝盈 | 護得久按司先 | 10 |
| 11 | 玉城親方朝薫 | <small>□</small> くて春くれば <small>㊧</small> (常盤なる松もみとりさしそへて色とまさる) | 11 |
| 11 | 辺土名里主先 | | 11 |
| 12 | 平敷屋朝敏 | 蕾てをる花にちかつきゆるはへるいつの夜の露にさかちそゆか | 14 |
| 12 | 平敷屋朝敏 | 花にませたてゝ匂ひまさらすは禁止ならぬはへる忍ひたかて | 16 |
| 13 | 同人 | 春や野も山も百合草の花さかりゆきすゆる袖の匂ひのしほらしや | 17 |

- 14 本部按司朝救
ねさめおとろきにたか袖よとめは庭にさく梅のしほらし匂ひ
- 15 義村按司
御代の春風にさそはれて出る深山うくひすの声のしほらしや
- 16 越来按司
深山うくひすや節やしらねとも梅の匂ひしちと春やしゆる
- 17 小祿按司朝恒
みとりさしそへて春風になひく庭の青柳のいろのきよらさ
- 18 同人
匂ひやちやうものこせ又春の間やあかぬ詠めたる花の情け
- 19 森山親方 平良親方父
ことふきや千代の春にいとかけてくりかへし／＼松のみとり
- 20 渡久山里親雲上政規
あたら花やすかみる人やをらぬ化にさきすれるにほひの惜さ
いつのよの露にうち笑てさちやか待兼てをたる花のつほみ
うれしさや廻て初春になればみとりさしそへる松のきよらさ
春のあけ／＼に庭のさんはしりおしひらく花の匂のしほらしや
蕾てをる花の宵の間にさきゆす情けある露のしのでふたら
梅や冬こもり節よ待兼て花の咲く春に逢かうれしや
- 21 同人
初春の梅のなまつほてをすや深山うくひすの声とまちゆる
- 22 読人しらす
深山うくひすもさくや此花の匂ひ送る風の便りまちゆら
- 23 右同
待兼てをたら深山うくひ(す)の初春の梅の花のほひ
- 24 右同
匂ひさく梅のちり落る迄も忍ふうくひすのおともなひらぬ
- 25 右同
- 26 右同
- 27 右同
- 28 右同
- 29 右同

18 19 20 22 * 23 24 25 26 28 29 33 34 * 36 37 38 39

- 30 右同 深山うくひすの節や忘れらぬ梅の匂ひ忍てほけるしほらしや
 31 右同 春風になれば深山うくひすの咲く梅に來なく声のしほらしや
 32 読人しらす うくひすの外にしる人やなひさめ奥山にさきやる梅の色香
 33 右同 七重八重たてるませ内の花も匂ひうつす迄のきしやなひさめ
 34 護得久朝置 美代の春風にふたつなひぬ花のさきゆて匂ひましゆる玉のまかき
 35 同人 年もたちかへて初春になれば朝夕よろこひのころはかり
 36 同人 きくもうれしさや梅の匂ひ忍ふ深山うくひすの千代のはつ声
 37 今帰仁朝敷 明雲とつれてふけるうくひすの声に初春の夢やさめて
 38 仲村里親雲上良常 はへる身やよかて朝夕花の上に遊てとかめゆる人やをらぬ
 39 小橋川里親雲上朝祥
 40 大里朝要 尋ねゆる花の近くなてさらめ忍ふ身か袖にほひたちゆす
 41 保栄茂朝意 蕾てをる花やいつの夜の露にさかち詠めゆか朝もゆさも
 42 上江洲由恕 春もいなゝたい果報事も目の前心うちやかゆる年やことし
 43 同人 いつも新玉の年のことあらなうれしことはかりいちやいきちやい
 44 小那覇朝亮 御望の梅や上ほしやゝあすかやとるうくひすのなかはきやしゆか
 45 大宜見朝昆 春にさく梅や深山うくひすのなどの物ともてふけるしほらしや
 46 田崎朝用 深山うくひすにたかすしらちやかやおとなしもなひらぬ春やきやすか
 流れよる水に浮ふ盃の余りから汲るけふの遊ひ

60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 45 43 * 42 41

- 47 佐久本喜章
 48 平良里親雲上
 49 奥原里親雲上
 50 久志里親雲上
 51 〇瀬筑親雲上
 52 渡嘉敷通睦
 53 伊是名朝直
 54 恩河朝祐
 55 真栄城守候
 56 〇嘉敷通睦
 57 上江洲由恕
 58 同人
 59 佐久本喜章
 60 佐久本嗣順
 61 祖慶筑親雲上
 62 松嶋里之子
 63 本村朝昭
 64 当銘里主

春雨にぬれ(て)つみとたる若菜おんちゆより外に誰に呉ゆか
 めくて春くれは野辺の百草のみとりさしそへてさかるうれしや
 便り押風の吹廻し(く)隣さく梅のにはひのしほらしや
 てちややう押列て春の山川にちり浮ふさくらそくて遊は
 初春になれば花の影便て袖に匂ひ移ち遊ふうれしや
 盃はうけてむかしもろこしのたのしみの流れ汲かうれしや
 花もちり飛ひてかやう押列て暮てゆく春の匂ひうつさ
 新玉の年やたるもよろこひの目眉うちひらき遊ふうれしや
 初春になればうれしこと載てひきゆる三味線の音のしほらしや
 長閑成美代の春風にひ(く)ふへと三味線の音のしほらしや
 梅の花笠や深山うくひすの晴間なひぬ雨の便りなたら
 春や花盛りてかやう押列て詠めやい遊ても(ち)のはな
 さくら木の蔭に打よらてかたる友のことのはや花のにはひ
 梅も匂ひしほらしやいかたらひもあかぬよらて詠めゆる花の木蔭
 春の空やすか霞てもなひらぬすみて(る)つきや美代のか(き)み
 ますたれよあけて詠めれば梅の月にうちわらてにほひましゆさ
 てる月の影もさく花のいろも共にうきやかゆるけふの空や
 露の玉かみてうち笑て花の咲出たるすかたいちもいやらぬ

- 61 62 63 64 65 66 * 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78

82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69 68 67 66 65
 右同 右同 右同 右同 右同 右同 右同 右同 右同 読入しらす 右同 右同 右同 右同 読人しらす 護得久朝良 小那霸朝親

よらて詠めれば暮る日もわすて遊てぬかれらぬ花のこかけ
 垣やへさめても隠れなひぬものや隣さく梅のしほらしにほひ
 夜明しらく庭のまし内に露かみてさきやる花のきよらさ
 打笑てさきやる朝顔の花に露の白玉のかゝるきよらさ
 にしきうち交りにはのませ内に露受てさきやる花の美さ
 庭のませ内に露の玉受てしほらし匂ひ立る花の清さ
 朝日さす影に打笑てさきやる色々の花のにほひのしほらしや
 見れはうれしさを庭のまし内に露含て花のさきやるきよらさ
 あさことに見れは露受て花のうち笑ひくさきやる清さ
 よひの間の露のうち笑てさきやら朝日さすやまの花のにしき
 夕間暮の空に匂ひのなひぬあれは庭にさく花もたかすしゆか
 おみなしかやゆらいつよりも増て花の影うつすつききよらさ
 あかぬ詠めたる花の面影やてる月と共に宿につれて
 西さかる月もしはし待めしやうれあかぬ詠めゆるはなの木蔭
 惜む日やつめて夕間暮になれはいきやしのかれゆか花の木蔭
 千年へる松もめくて春くれはみとりさしそへて若くなゆさ
 雪霜のふてもかわることなひさめときはなる松の千代のすかた
 花の下蔭に遊びすみなれていきやし忘れゆか春の名残

96 95 94 93 * 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79
 92

98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83

仲尾次政模 富永実文 比嘉統亨 護得久朝常 小禄按司朝恒 宜野湾王子朝祥 夏の部 読人しらす

いきやかな庭の青柳の糸に暮てゆく春やつなきほしやの
 さく花の影に行通ひく遊ふうくひすの声のしほらしや
 いつも春くれば深山うくひすの花の上に来なく声のしほらしや
 ふゆる春雨に野辺の百草もみとりさしそへて榮るうれしや
 みとりさしそへる青柳の糸に露の白玉やたかすぬきやか
 詠めてもあかぬ野山うちつゝきみとりさしそへる春の景色
 澄て流れゆる春の山河にちり浮ふ花のいろのきよらさ

ちやせんさらくたてる音きけはすゝしさや夏の暑さ忘て
 あつさすたましゆる手になれし扇たかすなつたかかせのやとり
 春過て夏に立帰てさきゆるでぐの紅のはなのきよらさ
 夏の日にあつさ余り過らぬ流れ水便てすたまほしやの
 若夏かなれは心おかされててかやうまはた芋よひきやい遊は
 ねやに入わらへすたまほしやしちをてにや又あかつきの鳥も鳴さ
 一寸もかた時も放さらぬものや暑さすたましゆる玉の団羽
 夏の日にあつさ与所になちいきゆる手になれし扇の情けさらめ
 池の玉水に影移ちさきやる蓮の花見ればすたくなゆさ

122 121 120 * 117 114 109 108 106 103 102 101 100 99 98 97

119

116 115 114 113 112 111 110 109 108 107 106 105 104 103 102 101 100 99
 仲尾次政昆
 松田賀烈
 外間現敬
 同人
 上江洲由具
 仲尾次政雅
 高良睦喜
 渡口政発
 比嘉賀慶
 花城故康
 読人しらす

さやかてる月に舟うけてすたてのかれらぬものや那覇のみなど
 夏も与所なしゆさ浮世名に立る数久田轟きの瀧のふもと
 てかやう押列て野に出て遊は今日や夏雨も晴てをれば
 かんすたしやあるい松の下蔭に澄てなかれゆる玉のいつみ
 てかやう思童へ野辺にさく百合草のしほらし匂ひ袖に移ち遊は
 てかやう押列て野に出て百合草の花の匂ひ袖にうつち遊は
 夏やこまをとて遊て暮さなや平松やこしやていつみ前なち
 夏も与所なしゆさ千年経る松のしたになかれゆる玉のいつみ
 花染の袖もぬきかへて今日や別れゆる春の名残たちゆさ
 蝉の羽衣や人並にきちもきもや花染の袖に残て
 若夏やなとひてきややう押列て玉水の流れ汲い遊は
 わかなつかなれは蝉の羽衣にぬきかへてころすたくなゆさ
 若夏かなれは童きやとゝもに玉水において遊ふうれしや
 春に匂ひそたる花の下蔭や若夏になても忘れくれしや
 すたゝとふきゆる若夏の風やいつもわか袖にやとて呉らな
 蝉の羽衣にふりかへてけふやころすたゝとなるかうれしや
 若夏かなれは野辺のもゝ草の押風になひくいろのきよらさ
 夏の日のあつさ走川に流ちころすたゝと遊ふうれしや

140 139 138 137 136 135 134 133 132 131 130 129 128 127 126 125 124 *
 123

132 131 130 129 128 127 126 125 124 123 122 121 120 119 118 117

秋の部

尚育王

読人しらす

一本坡名城里之子

同人

宜野湾王子朝祥

浦添王子朝熹

同人

小禄按司朝恒

具志川親雲上

夏の走川にすゝし風たちゆす若か水上の秋やあらね

幾年よへてもにこりなひぬものや白瀬走川の水のかゝみ

ふみてらち呉たるむかし覚出しゆさ夜半に飛渡る庭のほたる

月もいりさかて更る夜の空にこゝろあてゝらそ庭のほたる

たちよやい見れば穂花咲揃て押風になひくいねのきよらさ

見れはうれしさやこなし田の稲の真玉より増て粒のきよらさ

みれはうれしさや世かほ世の稲のうちなひきくゝなひちきよらさ

名に立る今宵くもりなひぬあれは水も玉鏡み影のきよらさ

雲霧も晴て月やすみよしの浮世名に立る秋の今宵

あかりさんはしりつきやけやいみれは庭の白菊のさきやる清さ

紅葉ちり浮ふ秋の山川にしからみよ立て詠めほしやの

見しらなやあれに色々の花の露にうち向て笑てさきゆす

花の袖かへちにやへもうち招け涼し風よひゆる野辺のすゝき

たとひ雲霧のへたてゝも月のおそひかくされめ本の光り

節やたちかはて秋とてやりいふすか夏よりもまさる昼のあつさ

たのむしやもとの光くもらさぬ押風にみかく月の清さ

* 164 162 161 160 157 156 153 149 147 146 145 144 143 142 141 165

150 149 148 147 146 145 144 143 142 141 140 139 138 137 136 135 134 133
 喜屋武按司朝救
 豊見城王子
 城田親方
 川平親方朝範
 豊里
 読人しらす

誰ようらみとて庭の草の葉の蔭にまつ虫の夜々になきゆか
 余りとくなくな野辺のきり／＼すまさるわかつらさしらなしちをて
 たかすたとたか雲の飛美衣や空にひときりのあともなひらぬ
 田舎山国もさやかてりわたる月によしあしの影やなひさめ
 菊よやしなやい百世迄むちやる人の面影や花に残て
 節やたちかはて秋になてをすか朝夕はなさらぬ玉の団羽
 秋風の立はのかそさうにめしやうるあつさすたましゆる玉の団羽
 てる月にみかく露の白玉や青柳の糸(に)たかすぬきやか
 蓮す葉に(おきゆる)露の玉ことに光りてり移る十五夜御月
 なかめれは空や雲霧も晴てさやかてりわたる十五夜御月
 うれしこときくの花に宿かゆる露の玉みかく月のきよらさ
 あきのさひしさも忘れゆさ宿のうれしこときくの花のほひ
 吹廻し／＼押風と列て軒にさく蘭(の)にほひの清さ
 有明の空や雲霧も晴て澄ててる月の影の清さ
 此秋や君かうれしこときくのいつよりも増てさきやる清さ
 菊見しちもとるわか宿の土産に可惜花やても一枝をたる
 虎瀬山出る秋の夜の御月くもりなひぬ美代のかゝみさらめ
 名に立るけふやいつよりもまさて澄てゝりわたる十五夜御月

192 191 190 189 188 * 186 185 181 180 179 178 177 176 170 169 168 167 166

151 渡久山里親雲上政規

詠めほしやあもの色々の菊の花のさく頃やしらちたはうれ

152 又吉全道

花の紅の色よりも増て深くそめなちやる秋のもみち

153 今帰仁朝敷

草の葉の露や玉と思なちやさいつの間になや又秋やなたか

154 同人

夜明しら／＼と露の玉かめて庭の朝顔のさきやるきよらさ

155 護得久朝置

月もなかみれば哀さま／＼の思事とまさる旅の空や

156 富盛按司

なれぬ与所島もなれしふるさとも空にてる月やひとつさらめ

157 佐久本嗣順

月もなかみればなれしふるさとの面影とまさる旅の□^(註)や

158 同喜章

雲霧もなひらぬてり清さあすか与所島の月やつらさはかり

159 本村朝昭

すみてなかめゆる山川の水に色深く移るあきの紅葉

160 護得久朝常

誰す織なちやか紅葉々のにしき春の花よりもいろの清さ

161 同人

ねふるめもねらぬ思ひしみ／＼とたかためにうちゆか夜半のきぬた

162 大田朝明

情けなひぬくもやなさけある風の吹払て呉らな後のこよひ

163 護得久朝惟

ねやの燈火やかた押のけれ頓てぬきやかゆさ十五夜御月

164 城間恒謨

暑さすたまちやる手になれし扇も与所になち暮そ秋になたさ

165 仲尾次政昆

幾年よ経てもかわることなひさめ天の河わたる□^(註)しのちきり

166 同人

朝夕袖飛ち遊ふたる山のかせも身にしみる秋になたさ

167 同人

名に立るけふや雲霧も晴て照渡る月の影のきよらさ

193 194 195 196 197 * 198 199 200 201 202 203 * 204 205 206 207 208 209

- 168 上江洲由具
 169 岸本賀雅
 170 同人
 171 比嘉賀慶
 172 同人
 173 徳田佐平
 174 同人
 175 同人
 176 仲尾次政雅
 177 同人
 178 同人
 179 松田賀烈
 180 同人
 181 外間現敬
 182 花城康故
 183 名城嗣利
 184 佐渡山安豊
 185 城間恒久

夏もはひ過て秋になてをすか手になれし扇や放しくれしや
 てかやう思わらへ波の上のほて天の河わたる美星をかま
 おもひ中巻にまきこめてたゞく哀しるものや夜半の御月
 さやかてり渡る月にみかゝれて薄葉にかゝる露の清さ
 新西吹話てはた寒くなれはころもうつ音も繁くなゆさ
 起てむてわらへ庭の朝顔の露かみてさきやる花の清さ
 誰よ恨とて野辺のきり／＼す夜々に鳴明ち浮名たちゆか
 思わらへ列て浮世住吉の月よ待兼るあきの今宵
 月影にたいんす思ひますわ身にの□□^{（かす）}はなすゞき招き呉ゆか
 詠としゆる秋毎に菊の花と□^{（む）}のしたるひとのむかし
 糸かまひれわらへちり飛る紅葉ぬき留て秋の名残忘ら
 てかやう思童へ月見しち遊は兼ていくましゆる十五夜たいもの
 庭の白菊のうち笑てさきゆすゆへふたる雨の情けさらめ
 廻て秋くれは押風と列て飛わたる雁^{（き）}のなたるきよら□^{（き）}
 庭にちる紅葉糸に貫留て暮て行く秋の形見すらに
 てかやう思童へ暮て行あきのちり飛ゆる紅葉ぬきやひ遊は
 春の花心あかぬ詠ゆす秋の紅葉ゝのにしきさらめ
 秋の紅葉ゝのにしきより増ていろ／＼の菊のさきやる清さ

* 226 225 224 223 222 221 220 219 218 217 216 215 214 213 212 211 210
 227

186 同人
 187 山城宗蔭
 188 謝花寛徳
 冬の部
 189 義村王子
 190 同人
 191 小橋川筑登之
 192 漢那親雲上庸森
 193 同人
 194 読人しらす
 195
 196
 197
 198
 199 護得久朝置
 200 伊是名朝睦
 201 同人

てかやう思童へ波の上へのほて月見しち遊は十五夜たいもの
 詠てもあかぬ澄でてり渡る月影になひく野辺のすゝき
 すたれ巻あけて詠れよわらへ庭の紅葉ゝの盛りたいもの
 春の初花も秋の夜の月も忘れてなかめゆる雪のきよらさ
 向てきゆる年やよかほてやりいちゆて笑て詠めゆるゆきの清さ
 時雨ふる間と水や波立る晴てさめ影の移てみゆす
 もゝ年の渡中しからみは立ていつも年波やよらぬあらな
 兎も角に浮世渡る身かふねにのよて年浪の繁くたちゆか
 留てとめらゝぬ老のしからみも明日や春の浦こきゆんとめは
 白露の玉とけふや初霜の草にうちかわて冬やきちやさ
 秋過て冬に移ていくきくのくれなるの色や花の名残
 天の御定やかはることなひさめ時雨雲わたる冬のはしめ
 旅立の時雨ぬれなけなやらちしらぬ名護羽地宿かしちやら
 冬の白雪の色に粉れてもかくれなひぬものや花のにほひ
 初冬の空の霜とおみなちやさ残る白菊の花のすかた
 暮ていく年もしらなあてなしの手毬うち遊ふ春よまちゆさ

251 250 249 248 246 245 * 244 * 239 238 237 236 232 231 230 229 228

219	218	217	216	215	214	213	212	211	210	209	208	207	206	205	204	203	202
同人	仲尾次政模	同人	高良睦輝	同人	佐渡山安豊	仲尾次政雅	同人	護得久朝惟	伊是名朝睦	花城里之子	多嘉良里親雲上	小那霸朝親	新城安規	本村朝昭	護得久朝常	池城親方	与那原里之子
	千草枯果る野辺のさひしさや夜明しら雲に松の嵐	咲残る菊の色清さあものいまうち御目掛れわ玉金	空や雨はれて雲霧もなひらぬ澄ててり渡る冬の御月	こゝろあて霜や繁くふて呉るな庭や白菊の盛りたいもの	世界や野も山も霜に枯果てかにもさひしさめ冬の景色	霜と思なちやさ残る白菊の庭のませ内に笑てさきゆす	きのふけふよとめはいな秋も過て木草枯果る冬になたさ	木枯の風や菊の上やふくな過去し秋の形見たいもの	草枯そ霜のふゆんてといふすか庭や白菊の花の盛り	色々の木草冬枯になても千代の色ふくむ松の美さ	枕そはたてゝ一人ねの空にきくもつれなさや冬の夜雨	年の数よとておとなほしやしゆたる童へしの真肝いつもあらな	うれしさや今宵雪もふり増て年よゝしみゆる便りなたさ	よしちよしまらね惜む年月の入相のかねに暮ていきゆす	一年につもる世話もよろこひも一人かたりゝにや夜や明ち	月日はひ過て一夜へさみたる年の中垣も今宵なたさ	千鳥鳴わたるこゑのつれなさや馴ぬ与所島の冬の夜半

269 268 267 266 265 264 * 263 262 261 260 259 258 257 256 255 254 253 252

235	234	233	232	231		230	229	228	227	226	225	224	223	222	221	220
同人	大工廻親雲上安祥	同人	与那原親方良矩	尚瀬王	恋の部	佐久本喜章	比嘉賀徳	同人	渡口政発	花城康故	富永賀文	徳田佐平	比嘉賀慶	仲尾次政昆	山城宗蔭	城間恒謨
浮繩と八重山縁の糸はゑて面影のたゝは互にひかな	布なさぬ内にあつやきり／＼すなきやんてやり誰すつ□□ ^{なき} 呉か	ふらはふれ無蔵か戻る道すか□ ^さ 雨や顔かくそ便りたいもの	心あて暫し空くもてたはうれ忍ふあとてらす夜半の御月	あきやう是きやしゆか漕みちやしらぬ深海乗ちやちやる恋の小舟		浮世住吉の松たひんす冬や嵐し吹音と朝夕きちゆる	秋や暮たすか素立たる菊や残て初冬の伽になゆさ	あめになかされて空や雲霧も晴て澄わたる冬の御月	ゆきしものふてもときは成松やかはることなひらぬ本のすかた	雨晴てみれはさやかてる月の霜の上に移る影の清さ	雪霜に野辺の草や枯果て空に有明の月と残る	草葉枯果てかにもさひしさめ暁の空の野辺の景色	木草枯果る雪霜のふても常盤なる□ ^さ や本の姿た	のゝにくさあとて可惜紅葉ゝも吹ちらち呉ゆか無情の嵐し	禁止や又ならね可惜わか庭の紅葉ゝよちらそ無情のあらし	かにも淋しさめ庭の竹の葉に繁く音たちゆる晩の時雨

295 294 291 288 281 280 279 278 277 276 275 274 273 272 271 270

236 同人 約束のあてとねやの戸はたゞくたかすてやりいふすや二人まちゆめ
 237 同人 むかし匂ひそたる深山うくひすのなき声忘れため花のあるし
 238 平敷屋朝敏 夢に無蔵御側ならへたる枕吹よおそまそな恋の嵐 下句八妻ノ詠歌
 239 豊見城王子朝長 春の初桜秋の薄紅葉似るものやなひさめあれかすかた
 240 義村王子 手枕の情いつも春ともて今につらさ身は冬の草葉
 241 同人 詰て覚出しゆささやかてる月に一夜仮初の花の色香
 242 同人 語らても互にいこと葉や残て恋し暁の鳥もなきゆさ
 243 惣慶親雲上忠義 いつもきくものと与所や思なしゆら逢ぬ□の空の松のあらし
 244 仲嶋よしや おそてとてなける科もなひぬ枕里か佛よ夢にしちゆて
 245 仲嶋よしや 浅猿しや浮世与所の上やしらぬ我身や此世界に生期ともて
 246 美里王子 朝日さそ影□ちりのとふことに我肝あまかしゆる縁のつらさ
 247 喜屋武按司朝教 義理の責縄も急き朽果てわか仮になゆる浮世ならな
 248 宮平親方朝綱 浮世ならはしの恋路たらやすかのかす仮ならぬ二人か中や
 249 宜野湾王子朝祥 思ひ身に余ていちや尽さらぬ哀口なしの花に向て
 250 同人 存命てをため幾年よ経ても忘ららぬもとの花のすかた
 251 同人 仮ならぬ恋路深く踏迷て物よ思尽そかたもなひらぬ
 252 小橋川筑登之 かたふきゆる御月しはし待めしやうれ思ひある無蔵か山路たいもの
 253 同人 自由ならぬものとのよて糸の頃に生□^①とて朝夕我肝やきゆか

298 301 303 304 306 307 308 312 315 316 320 321 323 324 329 330 332 333

- 254 高宮城親雲上
吸ぬものゝよて夢や夜々ことに袖よ引起そ花のわらへ
- 255 高宮城親雲上
詠めれば詰て思事とましゆる逆もかきくもれ夜半の御月
- 256 小祿按司朝恒
思ひ焦れても自由なゆめやすかいきやしかな朝夕拌みほしやの
- 257 同人
澄わたる月の傾ふきゆる俛に引されていゆる恋の山路
- 258 同人
忘れてやりしちも朝夕俤や立増い／＼めの緒さかて
- 259 同人
兼てから深く頼てあるかなや色分けてそめれ紺屋の主し
- 260 同人
にやへも音立て吹詰れ新西稀に振合ちゆてかたる今宵
- 261 同人
いきやし渡よかや浪風も立いふかみ乗出ちやる恋の小舟
- 262 同人
□るなやう互にちきるいこと葉の匂ひ身に深く染ておきゆて
- 263 本部按司朝救
とひとりのつはさかれは夜々毎に通ひ路の空や我自由やすか
- 264 同人
面影のたいんすたゝな置呉れは忘れゆ□隙まもあゆらやすか
- 265 同人
共に詠めたる夜半の俤やいつも有明の月に残て
- 266 恩河朝宜
情けおもよらはちきることはのうらやても与所にしらち呉るな
- 267 仲程良恩 一本二豊見城親方
里か手になれし花の下紐や幾春になてもたかすとちゆか
- 268 金城朝真
うきよ慣しの恋路たらやすかのかやう俛成ぬ二人か中や
- 269 同人 一本二恩納なへ
思ぬ故からと覚出しもしゆゝる我身や一寸の間も忘れくれしや

270 瑞慶覧朝綱
 271 同人
 272 瑞慶覧朝綱
 273 仲順親雲上
 274 久志親雲上
 275 国頭親方
 276 兼本
 277 豊見城王子朝尊
 278 古波蔵親方
 279 盛鳴親方
 280 喜屋武親方
 281 浦添按司朝英
 282 神谷厚詮
 283 辺土名親方
 284 美里按司
 285 江洲親雲上
 286 同人
 287 内間親方良経

ふられゆる我身にのよて佛のうち向ひく袖にすかる
 面影と名残つれる哀さにつゝみかくさらぬ袖のなみたよぬらち
 わか身振捨て思たすかとかひあれや片思ひ磯のあをひ
 思切らんすれは無蔵か面影の立増ひく目の緒さかて
 いろに頭れて落らねはのよて与所の咎めよか袖のなみた
 思事のあても与所にかたられめ佛とつれて忍てをかま
 目にもみられらぬ手にもとられらぬかなし佛や肝にすかて
 見ゆるものやれはとやひすてよすか肝にすくすかりあれか情け
 恨めしや義理によらぬ年よらち手とてひかれらぬ花の童へ
 夢に無蔵御側おそて佛の目の緒たつ浪にわ袖ぬらち
 浮世草の葉の露心やすか忍ふかた時も自由も成ぬ
 鶴に鴛鴦の思ひ羽付て朝夕つゝまれて暮しほしやの
 情あてかくす野辺の花薄き二人か玉の緒のおしさあらは
 一人ねの空やあかさらぬあてとうらめたる鳥の初声まちゆる
 □まきく一人いらぬ事迄も思ひ乱らしゆる縁のつらさ
 枕ならへとてみすか物語り夢ともてきちやめ御肝かわる
 約束の誓ひやたからはんはかはらへ罪の無蔵か上にあらはきやしゆか
 あさましや浮世いつも此いろへ情けなひぬ紺屋に頼むかなや

376 377 379 385 389 390 391 392 393 396 397 398 399 401 402 403 404 405

- 288 同人 渡地の浦やいつも浪風かつなぎをくふねのをてもつかぬ
- 289 玉川按司 渡海の上に我身やおくふねのこゝろ焦れとてまちゆる風の便り
- 290 漢那庸森 のかすわか袖や草の葉もあらぬ夕間暮になれは露の宿る
- 291 同人 思事や柱ら袖し真帆掛けて恋のせめ風と列ていきゆさ
- 292 同人 ぬちやからは浮繩いりさかて八重山互に倂や月にてらさ
- 293 同人 けふのつきしらに針の糸掛けてあれか袖わ袖とめてみほしや
- 294 同人 浪にもまれゆる浮舟の心我身やこまなかい捨ていまひめ
- 295 坡名城里之子 きやならはんともて恋の深山路に踏迷ていきゆる果やしらぬ
- 296 山里筑親雲上 恋の糸繩につなかれて小舟浮世渡路の潮時忘て
- 297 仲尾次筑親雲上 いきやかなていきゆら果や白波にぬれて漕渡る恋の小舟
- 298 同人 鳥たいんす人のし情の糸につなかれてなれる浮世やすか
- 299 同人 与所や浪立ぬ浮世離安く渡て楽しみゆる恋路やすか
- 300 同人 とやい捨らなや夕間暮と列てたゝく山寺のかねのしもく
- 301 高原里之子 思ひ有明の月と諸共に啼明す罪や誰にいきゆか
- 302 当間筑親雲上 新西吹く夜の一人ねの空やおしむ暁の鳥声まちゆさ
- 303 豊見城親雲上 一本二喜屋武親雲上
- 304 辻な口なイツツノオト 浪荒てさらめ恋の舟橋も掛て渡らゝぬ縁のつらさ
我な口なおもることに里かとおんおめはいやりさぬあてもいまいらやすか

305 玉金無蔵や水の上の御月拜み詰なけな自由もならぬ
 306 通て見る自由のならなしゆて互に節待る間の思のくれしや
 307 振別てをてもし情や互にかよはちと節もまちゆらやすか
 308 義理とめて里前節よ待めしやうれ結てある縁の化になゆめ
 309 仮成ぬ恋路夢にかよはちゆて節よ待兼る縁のつらさ
 310 義理やくれしものあかぬ生別れ便りあてあれにいやりすらな
 311 難面や夢の世中にとて朝夜義理の上に思ひくたち
 312 あひやんからい浮世義理のなひぬあれは二人仮成る恋路やすか
 313 思ぬ故からと義理に事よする隠れ細道のあらな置め
 314 迎もうちころす仮成ぬ世界に一期義理頼て暮さよりか
 315 とてもうち殺す惜む身やあらぬ一人焦れとておますよりか
 316 浮世のかともて我自由さんすれは恨めしやくたぬ義理の責縄
 317 恋路始めたる人と恨めゆる義理の責縄やとかなしちをて
 318 約束よしちゆをて無蔵待る夜や花の露まちゆすかんかあゆら
 319 高はしり明て里待る夜や花の露待すかにすあゆら
 320 道端のさしや与所の上にする我身やさしなやい里にすから
 321 闇の夜の鳥鳴ぬものしゆめいやなしゆて恨め無理やあらね
 322 花としりなけな情け尽しゆすも時の間の縁のくらさあてと

きやならはんともて捨ていく我身にのしゆかいことはに情け掛て

思切よめ里前音信もなひらぬ隠れ細道の草葉荒ち

捨ゆらは迎も佛も共にきりてあとかけもたゝぬことに

わぬおもる無蔵よおまぬ報ひかやわか思る無蔵やわぬや思ぬ

見るかたに移る花染の族らいつし取てわ自由なしゆか

たとひ与所列て遊ははんよたしや匂ひとん与所に移ち呉るな

袖合たるむつれ与所のいきやいやはんたるなひくつり俣とやゆる

結ぶ糸縁のむかし繰戻ち今になしほしやゝ浜の真砂

むすふ糸縁の(いな)朽んとめはし情の形見とらぬたすか

切て中絶て又結ぶ御縁替るなやう互にあの世迄も

与所のいきやいやはん替るなやう互に与所や花散そ嵐たいもの

いやなしゆて互にかよはしゆる思ひのよて事洩て与所のしゆか

あれかとももしかわ沙汰とんしゆらは哀れ啼たんで語て給ふれ

七門越て九門にわなひ御待しゆすかなま迄も里やにや与所列て

鳥もとなくと月も山の端に哀無蔵とまひて鳥もなきやさ

夜嵐のたゝくねやの戸は明て見れば里やこぬ月といゆる

ね間にもる月の我が心しらは恋忍ふ里と列ていまうれ

月の夜も夜へ闇の夜もよるへ里かまひる夜とにやよるさらめ

358 357 356 355 354 353 352 351 350 349 348 347 346 345 344 343 342 341

いきもいかれらぬ居もをられらぬ恋の道芝に啼よ明ち
情けあて給ふれ空しける雨もたまに約束の今宵やれは

忍ていく心与所やしらねとも袖し顔かくそ恋のならひや

ふる雨に便て笠に顔かくち忍ていく心与所やしらぬ

きやならはんともて恋の深山路に踏迷ていきゆる果やしらぬ

さやかてる月の影よ恨めたる人のいことはやなまとしゆる

なまと思しゆるさやかてる月の影よ恨めたる人の言葉

一粒ある花の糸に貫れよめぬかぬつく互に思て給ふれ

花当の里前花もたち給ふち花もたさよりか御胴いまうれ

はなとまは里前花もたち給ふれ早晚迄もとまは御胴いまうれ

里やいきすれの花とおめなしゆら我身や早晚迄も頼てをすか

のかす白露や蓄て待兼る花の上やふらぬわ袖ぬらそ

落ててやり涙た与所にあらはしゆめ袖のしからみの朽ぬかきり

宵も暁も思出しとかきり枕ら浮舟になそか心気

梅や花さきゆい庭や雪ふゆい無蔵かふつころや真南とふきゆる

月見しもあれか花見しもあれか面影と増る夜も昼も

忘れてやりいちもわすられめ朝夕なれし涕の目の緒さかて

いきやし忘れよか住なれし御側朝夕涕や袖にすかて

504 502 501 * 499 498 497 496 495 494 493 485 484 481 477 475 474 472
500

遊ひ佛やまれ／＼と立る里か佛や朝も夕さも

別て佛や互にあらやすか暮さらぬあすや一人さらめ

夜や夢繁く昼や佛のたちまさへ／＼忘れくやしや

昼や先責て兎角にしゆすか夜のこよなかや明し兼て

佛のたゝは沙汰よしゆんともれ夢繁くならは啼んともれ

夜々に夢繁く通はしゆる毎に覚て自由なゆる浮世やらな

三年思つもる人しらぬ哀玉金里にしらせほしやの

のしゆか徒に色付ぬかなに深く染らてやり心尽ち

わくの糸経に繰返し／＼掛て佛の増て立さ

わくかすの御縁あたらませ互に繰返し／＼切ぬことに

拝てなつかしや先ゞてやすか別て佛のたゝはきやしゆか

振別て一人くれしやてよ思はよしむ言の葉もあたらやすか

末吉の開門かねや首里の開門ともて無蔵起ちやらちわ肝やにゆさ

逢ぬ先をま口て焦れゆる間の物思ひてすと恋路さらめ

浮世自由ならぬ忘らんですれは詰て思ましゆる縁のつらさ

のかすとくかにあるわ身のしゆる恋や思尽すことの果もなひらぬ

かん自由成ぬ世界やなてくれはのしゆか世話／＼と物よ思て

結ひとちまらぬ御胸やてからや吸なさきをとていちや呉らぬ

394 393 392 391 390 389 388 387 386 385 384 383 382 381 380 379 378 377

美衣かさへしちもおみあわぬ二人吸ぬものゝしゆか思ひ尽ち

互にかたらたす夢の間とやすかまとるみゆる内に覺ていきゆさ

あれかい言葉のいな朽んとめはのよて語らたか朝も夕さも

あさましや童へ与所におてつきやめ朝夕語らたる情け忘て

一期てやりんてやたか始いちやか里や肝替て与所に馴て

捨られる我口くちのくつさてや思ぬ報ひとんあれにいかはきやしゆか

わかしゆゝる恋こひや干瀬に打小波よりつきやんとめはのちといきゆる

松の葉に二人ねても暮ちやすかなまや芭蕉の葉も窄くなとさ

わかしゆゝる恋や渡し舟心一期漕れとてうきよわたる

あれゝはんこぎゆいそかなてもこぎゆいやなは渡海やれはこがななよめ

わか忍ふ道にませ立る族ら吹ちらち給ふれこいの嵐

糸目から針目ほけるとも我身ののよて思里か美腰ひきゆか

顯れてゝやり里一人なしゆめ我身も諸共にならんしゆもの

二人まゝ成ぬ世界にをてのしゆかてかやう極楽の花の台

すみ習よとぢやないほしやあすあ殿内話三月嶋の一月

出てこよやれはむぢられやしゆすか出てあとゝかや里かはちゆめ

おもよりは里前嶋とまひていまうれ嶋や中城花の伊舎堂

568 567 566 565 562 561 559 558 557 556 554 552 551 549 548 546 545 541

412 護得久朝置
411 同人
410 金武朝穩
409 同人
408 保栄（巻）口親方
407 浦添王子
406
405
404
403
402
401
400
399
398
397
396
395

あへんからい逆ものきゆすましあらね朝夕つらこなしされらよりか
わ胸やちやうもわとの俣成ぬ世界にあれよ恨めゆるよしのあるい
互にまゝ成よる浮世小車のめくて来る間や替て呉るな
むねに物思はほたる火の影もわか身より出る光りともて
思ひ様仕様覚出しゆる夜や童へ声よ立てなかん計り
とぎなゆらともて詠めれば月の物とおもはしゆるけふの空や
思ひ有明の夜半の難面や馴ぬ与所島にをてとしゆる
旅宿の哀しらすなやあれに夜々に通はしゆる夢路便て
あかぬ別路やかにす難面さめ朝夕面影のいきものかぬ
只んてとしやすかのかやうかんなたるまつふたる縁のにや別ららぬ
此つらさしゆすもにやへもをらすかとくくつさあれば一人ともて
さらは立別ら与所めなひぬ内に頓て暁の鳥もなきゆら
節よ待めしや（う）れ廻て春くれは梅とうくひすのちきりしやへら
なみ（巻）口白玉の口（巻）に貫れゝはあかぬ別路のかたみしゆすか
あはれことの葉も霜に枯果てわ肝さら〜と雪とふゆる
音信や絶て倂や繁く馴ぬ与所島やつらさはかり
浪立ぬことに（口）つも此浦につなぎ留置な恋の小舟
なみた袖ぬらちあかぬ振別の哀しるものやねやの枕

608 607 606 605 604 603 601 600 599 596 594 593 589 576 575 574 573 570

430 同人
 429 同人
 428 同人
 427 同人
 426 護得久朝常
 425 同人
 424 同人
 423 同人
 422 同人
 421 惣慶良成
 420 翁長筑親雲上
 419 同人
 418 同人
 417 同人
 416 同人
 415 同人
 414 同人
 413 同人

浮世小車の廻て自由なゆる節よ待めしやうれちきりしやへら
 あかつきの空に落る白玉やあかぬ振別の涙たさらめ
 坂よおりかける車より増てとゝめかたなさや恋の心
 浮世浪立ぬ島に漕渡てあかぬかたらなや無蔵と二人
 かにおしさあるい忍てふやはちやる無蔵か手枕の夢のゆくゑ
 いのるわか心し情の糸に貫留て置な玉のいのち
 切もきりらゝぬ留てとめらゝぬわ肝まつふたる縁の小縄
 義理のま口せ垣や佛も共に通はさぬことのきじやならぬ
 野辺の草庭互に腕枕らあかぬいかたらひににや夜や明ち
 忘ららぬあてと浪荒さあても漕渡ていきゆさ恋の小舟
 無蔵か島元に漕渡る小舟思ひ真帆かけて忍てつちやる
 うつて恋しさや夢に御行逢拜て枕並へたる夜半の仕様
 見れば恋しさや平安座宮童へのきあけゆるうしほの花の清さ
 縁のもし情も深くそていきゆいきやかいきなゆら二人か行衛
 互に思切やい別ゆる涯にのよて又わ袖とやひひきゆか
 馴ぬ与所島もなれしふるさとも人のし情やひとつさらめ
 飛立るはへる花のませかきのくふかすの糸に向ていくな
 口ましかいち里に振れらはきやしゆかい言葉にかゝる露の命ち

626 625 624 623 * 621 620 * 618 617 616 615 614 613 612 611 610 609
 * 622 * 619

448 名城筑親雲上
 447 同人
 446 新城安規
 445 同人
 444 備瀬筑親雲上
 443 大宜見朝春
 442 同人
 441 又吉全道
 440 兼本里之子
 439 仲口良常
 438 仲真良運
 437 当間筑親雲上
 436 親泊筑親雲上
 435 小那霸朝亮
 434 同人
 433 同人
 432 同人
 431 同人

袖とやいひくな琴の音のことにひきは名の立る浮世たいもの
 暗闇よやれは暫し待めしやうれ二十日夜の月も頓てとゆむ
 山原と御国こかとへさめれはいきやかなていまひら音も聞ぬ
 空にてる月や思ひます鏡み詠めれは移るひとのむかし
 漕渡ていきゆる果や白浪の行衛定らぬ恋の小舟
 しらぬと所島に無蔵一人やち戻てこぬ間の思のくれしや
 新西吹く夜の一人ねの空や惜む暁の鳥声まちゆさ
 仮ならぬ故と別れやひをすかのよて夢繁くみして呉ゆか
 たかすおとしゆたか驚ろちやめ童へ二人手枕のね座とやすか
 い言葉のことに節またんすれは二人定まらぬ玉のいのち
 与所にいちいやらぬ思ひ有明の月に佛の増てたちゆさ
 はた寒くなれば浪のよるひるもかなし佛の増て立さ
 中絶てをすか言遣りわなひ頼ま朝夕忘らゝぬ沙汰よしゆんで
 忍ふくり舟にまちゆれともよすか逢ぬあら浪に袖とぬらす
 一人暮さらぬ琴の糸せめてかきならそあはれしらなやすか
 新西ふく夜や仲島の浦のひしたゝ音のわ肝せめて
 はたと縁結ふ白繩糸なはのきりてぬかれらぬ二人か中や
 きりていく先に頼むい言葉や与所にわか仕様かたて呉るな

644 643 642 641 640 639 638 637 636 635 634 633 632 * 630 629 628 627
 631

- 449 真謝里親雲上
 450 伊是名朝睦
 451 同人
 452 本村朝昭
 453 同人
 454 多嘉良親雲上
 455 久志里親雲上
 456 池城親雲上
 457 大宜見朝知
 458 浜元親雲上
 459 佐久本嗣順
 460 同人
 461 同人
 462 佐久本喜章
 463 同人
 464 大田朝明
 465 岱嶺和尚
 466 多嘉良里親雲上

たまさかに花の島は漕渡て哀船つなく方もなひらぬ
 芋の葉ようたて遊ぶたるわぬも恋の若草やなまをつたる
 夜々に落替る露頼む花にのしゆか様々の情けかけて
 うれしさの内に世話浪も立さ馴ぬ初旅(の)こひのわたり
 □又なひぬ蓮の心しち互に生期与所肝やもたぬことに
 しほらし思童へ蘭の匂ひ立てうち向ひく夢に見ゆさ
 与所のめの繁さしはし待めしやうれ月の山の端にいゆる間や
 幾里へさみて□なれし侘や一寸も離れらぬ袖にすかて
 あかと山原と糸の縁結て思ひ自由成ぬもくのくれしや
 あかと与所島に無蔵一人残ち袖とやい与所の引はきやしゆか
 首里御国人の侘と列てむにゆる芋も放ちおみと仕事
 浮世たつ浪に袖やぬれらはん漕渡て見ほしや恋の美崎
 きけはわか心ひかされていきゆさするあかつきの琴の調へ
 夢内にたいんす恋の慣しや袖し顔隠ち忍ていきゆさ
 無情の花たいんす朝夕もてなすは色香いやましゆる浮世やすか
 蕾てをる花や露受てさきゆいわぬや里拝てなまとさきゆる
 常に立替て御側よひましゆす初冬の霜の情けさらめ
 きしのま□垣の立んてよ思は兼てい言葉もあたらやすか

* 661 660 659 658 657 656 655 654 653 652 651 650 649 648 647 646 645
 662

484 大田里之子
 483 同人
 482 護得久朝良
 481 伊集里之子
 480 仲吉里親雲上
 479 知花里親雲上
 478 小橋那霸朝親
 477 同人
 476 同朝用
 475 田崎朝拳
 474 同人
 473 大宜見朝昆
 472 同人
 471 保栄茂朝意
 470 渡嘉敷通睦
 469 真喜屋実珍
 468 今帰仁朝和
 467 同人

とまひていく先や月影もくもて忍ふわかすかた隠ち給ふれ
 哀れ夢内に忍てかたらたす覚てなま迄もわすれく□しや
 振別れるくれしや□りなけな我身にのよて物思顔みして□□か
 思ておまぬ振すらむてとしゆすか覚らすに仕様与所にしりて
 あかぬかたらたる人の倂や哀琴の音にまさてたちゆさ
 なまからの先やいきやし暮しゆかや頼む人も御肝替ていまひ
 通ひ路の草葉踏荒そ科い与所めしのからぬ浮名たちゆす
 うちよする浪に打よられ／＼つなぐ方なひらぬ恋の小舟
 頓てきゆんともて松の下露にぬれてあかつきの鳥声きちゆさ
 新西ふく風の身にせめてふけは詰て思増る里か御側
 よしむことの葉や琴の音にのすてわ袖ひくよりも別れくれしや
 迷ていく先や梓弓心引よかへさらぬうき名たちゆさ
 渡ていく浦の浪荒さあればいきやかなていきゆらこひの小舟
 おしむ別路の花の倂やいつも明雲の空に残て
 しほらしものい声や朝夕さもわ身にきかち焦らしゆる花の童へ
 夜々に落替る露の玉よりも頼みかたなさやひとの心
 さやかてる月も情けあて二人か忍ふあと影や隠ちたはふれ
 無蔵とわか中やいわ浪の恋かうちたゝき／＼浮名たちゆす

680 679 678 677 676 675 674 673 672 671 670 669 668 667 666 665 664 663

485 大田里之子
 486 我那覇朝周
 487 上江洲由具
 488 同人
 489 同人
 490 同人
 491 同人
 492 佐渡山安豊
 493 同人
 494 岸本賀雅
 495 神里常德
 496 同人
 497 渡口政発
 498 山内盛熹
 499 護得久朝惟
 500 仲尾次政雅
 501 同人
 502 仲尾次政昆

互に自由なゆる浮世成間やてかやう漕出さ恋の小舟
 あはぬいたつらに野辺の草宿にまちゆて暁の鳥声きちゆさ
 夢の間に忍ふ手枕の匂ひやうつてなまゝても袖に残て
 闇路踏分てとまひりはんをらぬ行衛しら露に袖とぬらそ
 僅か夢の間の浮世渡ゆんて朝夕さま／＼に物よ思て
 浮世何事や忍ふとも無蔵よ与所のくなしゆすや忍ひくれしや
 し情けの糸につな□かれる我身や(浮世)与所へらひの隙やなひ□らぬ
 無蔵か佛や道しるへし□ちゆ□て行衛白露に濡ていきゆさ
 袖合たるむかし忘るなやう互に早晚も佛や月にのこち
 かにも難面め佛と名残早晚も仲島の浦に残て
 にや来ら／＼ともて一人庭出て露に濡なけなや夜や明ち
 明日の夕間暮や城嶽登てまちゆんてやり里に語て呉れよ
 恨めしや我身の与所の上やしらぬたのまらぬ者と一期ともて
 夕へむちやる夢や道しるへしちをてとまひ／＼にいきゆる里か住家
 わくの柄にすける真竹なてたいんす朝夕無蔵御側よらなやすか
 かにも難面さめ浮世こく小舟肝の梶ゆるそ隙もなひらぬ
 替るなやう互に幾春になても梅とうくひすのあかぬちきり
 のよてまゝ成ぬ里前影うつち我肝あまかしゆか月の鏡み

681 682 683 684 685 686 687 688 689 690 691 692 693 694 695 696 697 698

520 仲尾次政起
 519 安仁屋宗徳
 518 外間正悦
 517 田崎朝光
 516 同人
 515 山城宗蔭
 514 名城嗣利
 513 同人
 512 同人
 511 富永実文
 510 同人
 509 同人
 508 同人
 507 外間現敬
 506 同人
 505 同人
 504 護得久朝常
 503 花城康故

あけやうわか袖や浦の干瀬心浪のよるひ（ま）もぬれるし（ん）□□
 霰ちる玉も押払ひく忍てきやる心化になしゆめ
 たとひうづもれて雪折やしちも替るなやう竹の本の心
 なみのよるひるも思ひますこひか梅と松竹のあかぬ色香
 あさましやわか身夢の間の世界に哀れ思事の果（も）□なひらぬ
 夜の更る迄ものかす思里や横されかしちやらあてもなひらぬ
 一期てやりともてちきりしやる事もあたに肝替る人のらめしや
 結び堅めたるし情の糸や早晚迄も互にとかぬことに
 哀わかこひや三葉芹心いつも佛や三人つれて
 風にむまれゆる（糸）□柳心ませ立てたはふれかなし里前
 替るなやう互に幾世いつちやてもちきるい言葉の朽ぬかきり
 秋の紅葉ゝの色よりも深くし情の糸や染てたは（糸）□れ
 よしあしもなひらぬわかおもる人やならそ三味線の糸の心
 早晚迄もあかぬひよくおし鳥の思ひ羽のちきりかわて呉るな
 こひし屋久田港し情はかけていきやし塩屋湊渡ていきゆか
 振別て一人いきやし忘れゆか遊ひすみなちやる花の木蔭
 誠より外にのゝちきりしやへか替るなやう里前あの世迄も
 若か飽果てかなし思里に振れらは我身やいきやかしゆゝら

716 715 714 713 712 711 710 709 708 707 706 705 704 703 702 701 700 699

- 521 城間恒久 早晚も替るなやう松の葉のことに草の影迄も一道たいもの
- 522 比嘉賀慶 慶良間渡の潮や枯るとものよて無蔵とわかちきり化になゆか
- 523 比嘉賀徳 一人詠めとて袖ぬらそ思ひてる月の外にたかすしゆか
- 524 城間恒謨 無蔵かふつくろや埋火の心霰ちる冬も与所になゆさ
- 525 高良陸輝 てり清さあても誰と詠めよか思ひ有明の夜半の御月
- 526 徳田佐平 つなく方なひらぬあけやう浦波に朝夕もまれゆさ恋の小舟
- 527 伊是名朝直 空にてる月もすめてふく笛に思ひ通はしゆる縁のつらさ
- 528 同人 覚出ちやさむかし夜半の月影に忍てかたらたる人の情け
- 529 同人 花の上に遊ぶはへる身のことわたて自由なゆる浮世やらな
- 530 辻トキノマカト 此間や小舟風俣になれてなまや河内に金具留て
- 531 同山舛木ノカメ まし立ておかはのよて夜嵐に吹よちらされか花のほひ
- 532 同人 捨られるわみの恨めなひぬ置めたとひ打笑て返事やしちも
- 533 花城里之子 筆とゆることのなゆるわどやれは余多思事も言遣りしゆすか
- 534 同人 思て自由ならぬ人の佛ののけてのけらゝぬ肝にすかて
- 535 惣慶親雲上忠義 花も世中や自由成ぬさらめあれのしゆる夜や露も吸ぬ
- 536 神村親方 思ひ身にあらは事のよしあしもいやな焦れゆめやみのほたる
- 537 義村王子 思ひある宿も自由にとでいきゆひのよて焦れゆかやみの蛍
- 538 安仁屋政清 包てつゝまらぬ哀夏虫の身に余る程の思ひやれは

734 733 732 731 730 729 728 727 726 725 724 723 722 721 720 719 * 718

556 555 554 553 552 551 550 549 548 547 546 545 544 543 542 541 540 539

喜屋武按司朝教

大宜見親方

渡久山政規

当間朝宜

豊見城親雲上

同人

同人

野国按司かなし

豊見城王子

読人しらす

物思焦れゝは夜々のほたる火も我が身から出る光りともて

しる人やをらね草村のほたる一人終夜もゆる思ひ

蕾で露まちゆる花の咲出らは匂ひやたか袖にうつち呉ゆか

我が身しちわか身あかゝらちほたる闇に身をかくそ方もなひらぬ

恨めしや月も山の端に掛て頼む夜の空や更ていきゆさ

頼む月影の山の端にいらはいきやし思暮ち鳥声まちゆか

思ひつくさらぬてる月に向て詰て待兼る鳥の初声

月や月ともて与所や詠めゆら我身や暮さらぬ秋の今宵

余りとく鳴な野辺(の)きりゝす増る口かつらさしらなしちをて

思ひ身に余て夜々にまつ虫の与所に名の立すしらぬなきゆら

まゝ成ぬ無蔵かい言葉の露にぬれて松虫の夜々になきゆら

忘らゝぬ故と哀松虫と夜々に声立てともに鳴る

おもひきりゝす草に身は隠ち哀なく声や浮名たてゝ

逢ぬ難面や野辺のきりゝす共に声立て鳴んはかり

まとるめは明る夏の夜とやすか胸に物思は明しかねて

櫓梶音高く立るなやう小舟与所しらぬこひの渡りたいもの

ゑのかなにのよて浅地紺染の色分ち呉ゆか紺屋のあるし

起ち呉てかふし与所しらち呉るな見る人やおん胴一人たいもの

752 751 750 749 748 747 746 745 * 743 742 741 740 739 738 737 736 735

744

(雑の部)

557 尚寧王

よかてさめ兄弟や親かなし御側我身や与所島のあらの一粒

558 尚寧王御母

てる日にたいんすてらさとしゆすか与所嶋の習や廉相にあひた

559 尚寧王妣

北かせの真口吹詰てをれば按司添前てたの御船とまちゆる

560 尚質王

十尋屋にをても八尋屋にをても肝ときもさらめ按司も下司も

561 尚灝王

こひしあかつらの浪にすそぬらちかよゝたる昔わすれくれしや

562 尚灝王

世界や暗闇かおそむ人もをらぬ頓て開鐘かねもなゆらやすか

563 御同詠

上下やつめてなかに蔵立てうはひとる浮世治めくれしや

564 御同詠

いきたらぬ事や一人身にめしやうち百草のあはれ救て給ふれ

565 御同詠

いつみくちあけてかはき留めしやうれふたつなひぬ人の命やれは

566 尚敬王

わか身つて見ちと与所の上やしゆる無理するなうきよ情はかり

567 尚育王

厚き御恵や報る方なひらぬ朝夕さも千代の御願しやへら

568 御同詠

虎に羽つけて飛よりも早く雲にはしいゆる按司(の)御ふに

569 御同詠

新玉の朝に四方の民揃て唐土天口あなし千代のおねかい

570 御同詠

慎のあれは物毎によたしや朝夕思話れひとのこゝろ

571 御同詠

つゝしみあ一字取守てをれはのよてそこなゆか上も下も

572 尚泰侯

栄ていく中につゝしまなゝよめよかる程稲やあふし枕

573 久米具あ川王子朝盈

897 896 895 894 893 891 889 888 887 886 885 884 883 882 881 880

590 名護親方寵文
 589 喜安親方
 588 同人
 587 同人
 586 同人
 585 同人
 584 同人
 583 同人
 582 同人
 581 同人
 580 同人
 579 同人
 578 同人
 577 同人
 576 与那原親方良矩
 575 大新城
 574 同人

此世人間や皆弟きやともれ沖繩御間切や一家内たいもの
 あたに垣たひんす美衣掛て引いたいんすもとひらいや手取て引口^き
 らくふつの美帯よわらおし廻ち首里かなし美公事てわなひきたら
 親子押列て出立るけふや首里かなし天の御祝やこと
 首里かなし天の百年の御祝いくよくりもとそかつやしらぬ
 たとひ物毎にすくれやいをも人の見所や真ひとつ
 深山底もれる月の影しらぬ与所しらぬともてしちやらやすか
 人にあること口隠^②さらぬあすや闇の夜の梅のほひさらめ
 敬の一字身に守てをればうきよ物毎に怪我やなひさめ
 いきたらぬ事や一人たらひゝゝ互に補てと年やよゝる
 人のよしあしや慣しと列て覚らすにうつるはなのほひ
 互にあとさきや一人頼みゝゝ早晚も替るなやう年やよても
 かにもつれ口^④さめ旅の上の空や詠めゆる月も伽やならぬ
 こゝろあてのめは世話事も忘て酒やのちのへゆる葉やすか
 六七十なても年よてとしゆるいきやしかな肝やいつも童へ
 早晚かたらともて御待しゆる内に御船や一走り那覇の湊
 浮繩秋山をくれなるにそめてやまと吉村の御茶の遊ひ
 親になて親の恩しゆんでやりのむかし奇言やなまとしゆる

923 922 * 918 917 915 914 913 912 911 910 * 908 906 902 901 900 899
 * 920 * 909

608 同人
 607 同人
 606 同人
 605 同人
 604 仲島よしや
 603 仲嶋よしや
 602 同人
 601 栢堂和尚
 600 同人
 599 石嶺親雲上
 598 同人
 597 同人
 596 同人
 595 平敷屋朝敏
 594 同人
 593 具志頭親方文若
 592 同人
 591 同人

山路ふみ分て道しらはわ身のたとひなましゝものうらめゆか
 鳥たいんす深山繁る木よいらて我か身かこさめることのしほらしや
 ほまりそしられや世中の習い沙汰もなひぬものゝやく立か
 おいきもしやへらぬすみもしやへらぬつほて石なやいそくてをらな
 たとひなましゝもたか列ていきゆか此世やみなちゆて一人さらめ
 みたれ髪さはく世中のさはきひきかそこなたらあかもぬかぬ
 あげやうわか袖や浪下のひせかかまく間やなひさめぬれる心気
 四海浪立て硯水なちも思事や余多書もたらぬ
 よたり玉ちらちのむ間のうきよさめて欲悪のつかはきやしゆか
 酒もあかよりは此世をて上れ祭りしたゝれのあの世いきゆめ
 袖や紺染にそめなさぬあても心定めたる人と仏
 うれしさや里か座羽箒たはうちむねに塵つかははらて捨ら
 久葉もそよ／＼(一)嶋もとな／＼とつなきある牛のなきゆらとめは
 なゆるものきかぬならぬものきちゆす此世からあのよ近くなたら
 生居たる間や我身籠相にめしやうち死はかんしやう門に通てのしゆか
 あんま主やよかて生れ嶋いまひゝ我身や仲島のあらの一粒
 一ノかいき二かいきよと遊ひゆたる早晚の間に里やおとなゝたか
 恨む比嘉橋や情けなひぬ人の此身渡さてやり掛ておきやら

949 948 947 946 945 944 943 942 936 935 933 932 931 930 929 928 927 924

626 豊見城王子朝祥
 625 同人
 624 美里王子
 623
 622
 621
 620
 619
 618 同人
 617 宜野湾王子朝祥
 616 義村王子
 615 玉城親方
 614 田嶋親方
 613 高嶺親方朝行
 612 同人
 611 神村親方
 610 銘苅子
 609 同人

糸柳心あたたませ我身のよて羽衣や風のやゆか

二十一日の夢やいなむかしなるい覚て極楽の木戸にいゆる

さやかてる月にさそはれて我身の詠めらんともて出ていきゆん

むかし恨めたる暁の鳥声なまに伽なゆすしらぬあたさ

我が身さめともて与所おめはのよてそしりあさむきゆか人の肝の

御主かなし御願なゝのこなそろて出たちゆる肝にさひのあるゑ

袖に匂ひ移ち朝夕詠めたる花の俤の忘れくれしや

化になひくなやう野辺の花薄き一期たのまらぬ風に向て

うち重ね／＼かさなゆる御祝美代の御盛のしるしさらめ

思事のあても与所にかたられめてかやう押列て遊て忘ら

たとひ仲島や音絶てをてもいつし名のくちゆか恋の小缸

袖ふたる昔夢やちやうもむてはしはしなくさみになゆらやすか

かすかけてわたる深山くほこゝろ一期身の世話の果もなひらぬ

やみの山原や道しらぬあもの月てらちたはうれ仰き拝ま

情け身に身にそめてわかれよるきはやうしろ髪引き嶋の名残

虎頭山出る秋の夜の御月くもりなき御代のかゝみさらめ

なまになて肝しきもと恨めゆるよしまらぬ月日遊ひすくち

とし明んてすも夜の明る迄よけふと御万人のむねやあきゆる

989 988 987 986 985 984 983 982 979 978 975 971 964 962 956 955 * 950
 951

豊見城王子朝尊

押風もすたしやてかやう押列てさやかてる月の影に遊は

627 若菜摘て人やなくさみもしゆすか思ひつて我身やくれし(や)はかり

628 いかなこゑ立てなき(や)んてやりなまや与所に思なちときちゆらやすか

629 三味線の音声きゝほしやとしちゆるわか心迄ものよてひきゆか

630 治まとる御代のしるしあらはれて深山すむ鳥も人になれて

631 小祿按司朝恒
てかやう押列て花見しち遊て暮ていく年の名残わすら

632 同人
たるやても人の肝や白糸のそめなすは色の替るうきよ

633 同人
浮世物毎に情けある習ひ人になてひとの哀しらね

634 同人
肝迷てさらめ頼まらぬ花は与所の詠めゆす朝夕きじて

635 同人
いつし忘れゆか朝夕わか親の心なくさみるひとのなさけ

636 同人
存命てをればむかしくりもとち哀かたらゆる節もあゆら

637 同人
立別る袖に露の玉ちらちよしむい言葉や忘れくれしや

638 同人
名に立る大和御登りや下り御佳例吉めしやいる御願ひしやへら

639 同人
親かなし始我々のねかひも御登や下り糸の上から

640 同人
思つくそ月日早く押過て寅のあきはしり御待しやへら

641 同人
かにくれしやあるゑまゝ成ぬ我身の別らてやりすれば袖や引い

642 同人
色にあらはれて移ていくものやうき世人々のはなのこゝろ

643 同人
只一人をても与所の前よともて朝夕慎す要めさらめ

644 同人

- 661 玉城按司
 始あることに終りつゝしみや人の行ひの要めさらめ
- 660 内間由栄剃髪改名宗腹
 にしきうち重ねうれしこときくの花さきゆる頃に又も拌ま
- 659 同人
 いきやしかな肝に月の影移ち歩む道広く照しほしやの
- 658 同人
 身持かなしくやさな置めやすかいちも又いふもの旅の空や
- 657 同人
 義理しめ縄とかは又も袖合れよめわかまゝに成ぬうき世やすか
- 656 同人
 花のよしあしやさく俣の姿た誠頼もしや匂ひさらめ
- 655 小橋川筑登之
 なしやなし出ちあはれ母親やおとなわかすかたむたないまうち
- 654 同人
 可惜身はもちやいつらさ思なそな苦みや樂の基ひたいもの
- 653 関勇助
 今帰仁をてや肌寒さあたす浦添てたはうちのこくなたさ
- 652 瑞慶覧昌綱
 木綿はたなかゑしら縄うちはけて無蔵につんかさなもめんこはな
- 651 同人
 月日ある間や光なひぬ置めたとひ有果て野山なても
- 650 兼本
 扨て覚出しゆさむかし唐土の民とたのしたる玉のうてな
- 649 小祿親方
 早晩も暗闇の道にをめやすか月とゆむ間のまちのくれしや
- 648 祝嶺親方
 きけはなつかしや早晩迄もも口て樂も苦もしちやらやすか
- 647 浦添王子朝熹
 あにある赤ぢやなものなけて呉るな晝の別れしらすそ科に
- 646 浦添王子朝熹
 上ん殿内たん前はんし前といちゆて遊ひゆたる顔の忘れくれしや
- 645 同人
 時ならぬ嵐吹んでよおめはませ立る隙もあたらやすか

679 仲田親方
 678 我如古里親雲上
 677 同人
 676 同人
 675 同人
 674 同人
 673 同人
 672 久手堅筑親雲上
 671 同人
 670 東風平親方
 669 伊計親方良徳
 668 豊里
 667 同人
 666 口口親方朝義^{森悠}
 665 同人
 664 仲程良恩
 663 同人
 662 安慶田

草葉なめ分ち世界の為しちやる神の代のむかし学ていまうれ
 外や破れてもよたしやさめ我身のひかりある内のはつかしやは
 花や節くれはうち笑て咲ひ詠めらぬむきやる人と哀
 忍ひことやれは残そい言葉もならなしゆてあれかむきやらとめは
 鼓責時ならち開鐘かねやうとな無蔵か起あかていきゆらたいもの
 花よ詠めても紅葉なかめても詠めゆる人の心さらめ
 住人やをらね荒果る宿にたか為にさきやか庭の梅や
 玉の緒のいのち限りあてさらめ貫も留らゝぬわ花ちらち
 後生の長旅の戻られんともてあてなしの童へむきやらやすか
 わぬ童へともてくなしゆらはくなすくなし田の稲やあふし枕
 御慈悲ある故と御万人の間切上下も揃て仰口^き拝む
 暮れる日も忘てあける夜もしらぬ浮世与所なしゆる花の木蔭
 たとひむらつきも周章様引なせめつゆるみつの手縄当て
 楽な嶋ともて漕渡て見れはこひや苦みの潮とのにゆる
 明て又あける秋のくれなるの錦きちいまひる御願ひしやへら
 あさましや夢のうきよ渡ゆんて朝夕肝の門や世話のたゝ口^き
 わか自由のなゆてひきよ留置口^な立別る里か美衣の美袖
 可惜瑠璃の玉にこり川に落ち澄ちすくる世もあひかしゆゝら

1064 1061 1057 1056 1055 1054 1053 1052 1051 1050 1049 * 1048 1047 1046 1045 1044 * 1041 1040

680 かへし
 681 上間筑親雲上
 682 安仁屋政章
 683 徳元里之子
 684 同人
 685 奥武喜教母
 686 野里安重
 687 保栄茂親方
 688 大宜見親方
 689 同人
 690 美里王子
 691 読谷山王子
 692 同人
 693 同人
 694 江洲親雲上
 695 西堂
 696 翁長良真
 697 盛島親雲上

にこり水ですも時の間とやゆる泉ある川のすまな置め
 潮時見ち渡れうきよこく小舟たとひ波風や立ぬあても
 蜘蛛の糸かすにかゝるなやうはへる忍ふませ内の花に迷て
 誠ある人の跡や早晚迄も栄へゆくためし数やしらぬ
 暫し鳴鳥も心あてくひらな三年別れちの今宵やれば
 名を残そことのしゆ／＼てしちなゆめせめて親の腰引ぬことに
 おきやがもゑ美代にかりなをてさらめ二月船うきてむきやいきちやい
 此頃にあれか沙汰かし□呉ゆらいらぬ年寄の夢にみゆす
 袖台遊ゆたるとし行逢てけふや昔おの頃のにやおもはれて
 互に思忘て□に成昔覚出ちやさ今宵月に向て
 松下の草葉冬枯になると牛や山本につなぎおきやる
 袖よ引留て暫してやりあれかいちやるい言葉の忘れくれしや
 聞はきく毎にたか宿も軽さ誠美瘡や今年さらめ
 此殿内うちに菊の花活て枝見れはなんぢや心やかかね
 はる／＼と拝てなつかしや袖に秋の夜の露のふゆる繁さ
 天と地の中にまてと字のあすやかしらとり名付まわす手先
 などの屋の習ひと外むぎのならひものい様仕様浮仮とするな
 わか心尽ち朝夕そめなきやる紺染の糸もさめていきゆさ

1089 1087 1084 1083 1082 * 1080 * 1077 1076 1075 1073 1072 1070 1069 1068 1066 1065

- 698 鉢嶺筑親雲上
思きやけもすらぬはるくといまうちかたる嬉しさに百氣のたさ
- 699 知念筑親雲上
たとひ身かかはねさらすともよて胸内のかみ暗くなしゆか
- 700 崎山筑親雲上
あの口くち導ゆるかねの声きけは出立る我身やよくのくれしや
- 701 高宮城里親雲上
歩むこと深く思詰てをれば手放さぬ玉のきつのつきゆめ
- 702 泉川親雲上
慶良間から唐土直に乗めしやうちうれし顔里よ拝むことうさ
- 703 糸数里之子
那覇の親泊押立る柱らかたひらの城ひきゆよはしら
- 704 神谷厚詮
汀間と安部境のかのしたの浜に無蔵と振別の百のくれしや
- 705 同人
七八十迄や並々のよわひゆねのよわひ越て百の御祝
- 706 幸地里之子室
時ならぬ嵐吹ゆんでよおめはませたてる隙もあたらやすか
- 707 尚貞王
なんちや春なかゑこかねちく立て例し摺り増る雪の真米
- 708 義村王子
栄ていく宿の庭の呉竹や節毎に千代の祝ひこめて
- 709 同人
松の葉のことに二葉から出て幾千年さかる宿のうれしや
- 710 与那原親方良矩
鶴亀や松と竹の葉と共にもといつ迄もまたひさかひ
- 711 大工廻親雲上安祥
あやかやいみほしやことふきや八十八になられてもなまのさかん
- 712 同人
鶴亀とまつによはひくなへとて千年むたれやう果報な御主前
- 713 宜野湾王子朝祥
幾年よへても色よ増りとて庭の松竹のもたへ美さ
- 714 同人
朝夕もて遊ぶ三味線の音声きけは思事も忘れていきゆさ
- 715 本部按司朝教
二葉から出て幾年かへたら岩ほたき松のもたひさかひ

1109 1108 1107 1106 * 1103 1102 1101 1100 1099 1098 1097 1096 1095 1093 1092 1091 1090

733 732 731 730 729 728 727 726 725 724 723 722 721 720 719 718 717 716
 小祿按司朝恒
 同人
 伊舎堂親方
 読人しらす

寿よのへる菊のさかつきや汲かはし／＼もゝと迄も
 うれしさや母の十百歳よねかて初春の子の日祝ひ遊ぶ
 花もよろこひの眉開きをれは頓てうれしこときくの申し
 みかく言の葉の玉やいつ迄も光りかゝやかち沙汰と残る
 拝みほしや□ちをて拝たことさらめ□み詰なけな夢よともて
 庭□梅さかち床に伽羅飾て福祿はかけてもゝとてふ迄
 うれしさやめくる年の新玉よ貫かさね／＼もゝと迄も
 松の上の鶴やすかたふりすれは亀やうち笑てしほ花ふきゆさ
 此秋や君かうれしこときくの早晩よりも増てさきやる清さ
 うれしこときくの花の盃や持ちなけな千代の祝ひこめて
 稲やかりひろてほしかりもしちをてよかる日よ撰てまきゆて遊は
 ほめそしらなひかゝはるなうきよひとや只誠ひとつたいもの
 与所しらぬともて心欺くな天と地の中や鏡みたいもの
 与所の上やたるも秋の夜のさやか我身のよしあしや闇路心
 肝のもてなしや蓮葉のことにかとのあてかとのなひらぬことに
 走川の水やはりや淀むとも首里かなし美公事ゆとの□よめ
 世界やふりものゑあかひ屏風立て花や押隠ち匂ひやきやしゆか
 のかす思里前吹廻そ風に花の移り香の匂ひ立る

* 1135 1132 1131 1129 1128 * 1124 1123 1122 1121 1118 1117 1116 1114 1113 1111 1110
 1136 1127

751 750 749 748 747 746 745 744 743 742 741 740 739 738 737 736 735 734

節替るうきよしらなくひすの時の間の花と一期ともて

深さある故と浪風も立る浅海こき渡れ恋の小舟

玉金親やなしとなしめしやいるいちきかしきゆさやなどの勝れ

生期頼まらぬ花とてやりいふたる人のいことはやなまとしゆる

伊舎堂森登て手巾持上ればわかふたる手巾里かふゆさ

逢ぬいたつらにもとるあかつらのよすかさゝ浪のわ袖ぬらち

あむ口む難面や薬師堂の浦の鳥む口む諸共むに啼よ明ち

真謝と真仲地や通ひほしやあすか白瀬ふり松のしたのしけさ

真謝の浦浪のけふとりてゝもの馬に鞍おそてわ無蔵つれら

走川のことに年浪や立い繰戻ち見ほしや花のむかし

別れても無蔵か情け有明の月に俤やてりよ増て

覚出しゆさむかし別路のつらさなまに暁の鳥声きけは

いきやし忘れゆか人のし情のたとひ音信や絶てをても

幾世成宿か住馴し人の音信もなひらぬ荒よ果て

美懐明てわぬ隠ちたはうれ御船登て里か住居所拜ま

朝おぼん夜ほんわかおしやけならていきやし三年御旅御待しやへか

わやうまいあてなしに情け掛めしやうちいきやし思里や御旅めしやいか

おもかことなゆるうきよやたらませ旅のいく先も列ていきゆい

1168 1167 1166 1165 1163 1162 1160 1157 1155 1154 1153 1150 1149 1148 1141 1139 1138 1137

769 768 767 766 765 764 763 762 761 760 759 758 757 756 755 754 753 752

よしぢよしまらぬ旅の空やれはかなし振別もすらなゝゆめ

縄ヒ口ゆる御船のよしちよしまれめいまうちまうれ里前朝夕拝ま

いまひつかは里前御状もたち給ふれ心やす〜と御待しやへら

三重城に登てうち招く扇子又もめぐりきて結ふ御縁

里と振別でもとる道すからおもことやかたる浜の真砂

御側をてたいんすおめやまさやへい別てわぬ一人ならばきやしゆか

そめなれし御縁いきやし別れゆかいまひる方我身も列て給ふれ

哀里よしむことの葉も絶てかきくもて雨のふらなやすか

むね内や涙た顔つきや笑て余多与所へらひもすらなゝゆめ

いのちさへわ身の存命てをれは又拝むこともあゆらやすか

六十かさへれば百二十の御年も〜といつ迄も拝てすてら

遊ひほしやあてもまとに遊はれめ首里天かなし御祝やこと

おとなゝたんでやり遊ひ忘れゆめ遊ひ庭の片手むまか片手

押列て互に花の本忍て袖に匂ひ移ヒ口詠め遊は

けふや御行逢拝て色々の遊ひ明日や佛のたつよとめは

てる月も清さ押風もすたしや押列て互に遊ひほしやの

経たらす〜緯たらす〜思里とわ身と遊ひたらす

暮される間や先くらきみやへら暮さらぬ時やとまひて拝ま

1219 1211 1208 1206 1205 1189 1188 1187 1183 1182 1179 1178 1177 1176 1174 1171 1170 1169

787 786 785 784 783 782 781 780 779 778 777 776 775 774 773 772 771 770

別れかたなさや互にあらやすか難面の余り一人ともて

此つらさみやかな捨ていかれよめたとひ朝顔の花といちも

物思顔しめてすてゝいかれよめ如何な義理の上の浮世やても

里拜む夜や宵とめは明るかたらひ尽さらぬ夢のうきよ

宵とめは明る夏の夜の習や玉金御側夢の心地

俤と列ていきやしわかやべかかたらてもあかぬなれし御側

すてゝいかれらぬかなしさやあれか立別る袖にすかて啼は

しはし手枕に鳥も鳴すめてかなしさやあれに思ひ残ち

かなくゝと互にかたらゆる内に情けなひぬ鳥の別れしらち

月の影たいんす袖に宿かゆいしはし待めし（やま）□れかたらひほしやの

にや又いつ拝てかたる夜やしらぬ別ていく道の露の繁さ

遊ひ馴そめて立別るけふやうしるとて引き嶋の名残

人の思切や梓弓心さらは是迄の別れすらな

鳥やちやうも飛ぬ渡海やへさめとて夢のふれものや御側ともて

なれぬ与所島やかにも難面さめ頼てかたらゆる人もをらぬ

ゆくゑしらなしゆて待兼らとめは哀よく増る旅のつらさ

素立らぬ親ののよてわぬなちやか花に押出ち与所にもまそ

此哀しちと渡ゆかやうきよ又と繰戻ちむたぬ世界に

1245 1244 1243 1242 1240 1238 1236 1235 1233 1232 1230 1229 1227 1226 1224 1223 1222 1220

805 804 803 802 801 800 799 798 797 796 795 794 793 792 791 790 789 788

我身やのかかないる
与所や灘安く渡れたのしみゆるうきよやすか
楽も苦も時んてといふすかかにも難面さめ暮しかねて

我身のむね内やあれの海心思ひ尽さらぬ浜の真砂

あけやうわかむねや奥山の枯木朽果る迄も与所やしらぬ

ありし様かへて花の身よやれは余多与所へらひもすらなゆめ

潮もみちふくて渡り自由成ぬしはしまて千鳥言遣りたのま

むちやる世や長さむたぬよやつまてはかなしや露のやとるこち

紺染の袖のいなくちゆんとめは百八の玉やぬかぬたすか

廉相におみなされ焦れ果しなはかんしやう門の草葉荒すとめは

よりつめる年に無蔵よ先立てあさかほのいのち暮しかねて

なつかしや人の此世別れたす去年の今月の今宵とめは

朝夕さもよらてあかぬかたらたる人もいな草の影にわかつて

あはれむね内や死出の暇乞と旅に事寄ていちやらやすか

あてなしの童へ死出か旅しめて山路ふみ迷て啼らとめは

死出の山道に一人なきいらは手取て引たはうれ阿弥陀仏

あてなしのわらへ道迷て啼ナドは押戻ち給ふれ阿弥陀仏

朝夕血の涙た袖ぬらさよりや暫しまて列ら我身も共に

たるともてきゆか一言もなひらぬむかしかたらたる友とやすか

1270 1269 1267 1266 1265 1263 1260 1259 * 1256 1255 1254 1251 1250 1249 1248 1247 1246
1258

823 822 821 820 819 818 817 816 815 814 813 812 811 810 809 808 807 806

つかに手よかけてわか呼び啼も後生におてつきやめいらひもすらぬ
夢にたつねても音信もなひらぬ哀かたらたる人のゆくゑ

哀磯はたやかにさひしきめ朝夕さゝ浪の音声はかり

深山さく蘭の匂ひとよくましゆるたとひ見る人やをらぬあても

与所からと人の年やよらしゆる肝やなまはたち内とやすか

年や秋すれて冬枯になても肝や若松の春のみとり

ひやくむたぬ世界にも思てのしゆかけふ遊て明日やしらぬいのち

つく／＼と一人心たつねれは自由に渡られる世界やあらぬ

むちやれかな分ち布になすはかり花もやすらみも織としやへる

い言葉の匂ひと此世界の形見ちりてよしまらぬ露のいのち

きけは淋しさや夕間暮と列てたゞく山寺のかねの音声

物のよしあしやにしきさく花の色のことわかちみしてたはうれ

□きよ住かねて隠れとる宿に余りてり清き夜半の御月

朝夕身に添てきちやる此胴衣肌のうちかけてすくにいまうれ

形見なるどんしゆ肌のうち掛て是と後生迄の支度さらめ

た□ひ村雲の隠そ月やてもはれる間の影に忍て拜ま

おもひとにわたる風便りあれば浮舟のこかれのよてしやへか

浮舟の焦れ時の間とやゆる吹あわそ風のあらんしゆもの

1298 1297 1296 1292 1291 1286 * 1285 1284 1283 1281 1280 1279 1278 1277 1275 1274 1273 1271

841 840 839 838 837 836 835 834 833 832 831 830 829 828 827 826 825 824

冠首

籬内のくれしや思ひしりめしやうち風に音信や聞ちたはうれ

忘る間やなひらぬ思やしゆゝれとも便り有る風のうすくあれは

雪に詰られて梅や匂ひましゆいつらさ思忘て節よまたね

春や花さかりなつかしや童へあきはてゝからやふゆんさらぬ

消果てあとにたつね来る里や物思ふれ〜と啼らとめは

まとろまんすれは夢にすかさされてさめて終夜物よ思て

四方の民迄も今年美瘡や軽く安々と出るうれしや

蘭の匂ひ(たてて)御座に伽羅だけは誇て美瘡の神やいまひさ

上や下迄も今年美かさや願ひのこと三粒出るうれしや

里々に時行る歌迄もなまや軽く美かさの御願ひ言葉

長閑成御代にはやる美かさや上下もかろく出る嬉しや

歌や三味線に躍羽しちをて美かさの御伽遊ふうれしや

只三粒たはうち今年美かさや上下も仰く神のめくみ

伊渡の山寺の時か失なたら約束の兼次あてもなひらぬ

辻や花盛り渡地や渡て恋や仲島の浦のとまり

道てらそ月や雲にかくれたひいきやしわきぢゆか雪の山路

よろつ松山の院にかけうつち法の道てらそ雪の叟

寅のはの風に寅の日に打ち虎のはりしめて虎の門口

1317 1316 1315 1314 1313 1312 1311 1310 1309 1308 1307 1306 1305 1304 1303 1302 1300 1299

859 858 857 856 855 854 853 852 851 850 849 848 847 846 845 844 843 842

こんながひの御待月よての御待なまからの御待日よて御待

あかと渡海なかひ糸の掛られめ真鱸押風とにや糸さらめ

沖の側迄や思弟きや部列て渡中押出れはかせとたのむ

およそからみればあかと渡海やすか御船はらちみれば近地たいもの

山川の湊すくに乗めしやう(ち)うれしかほつきの拝むことうさ

御旅しも美さ美公事も清さいきゆる親かなしすたしめしやうち

三年重ねゆす待なかひさあすか願て自由成ぬ北京御旅

百氣いきのへる里や旅しめて朝夕肝□願算やしらぬ

主の前御状拝て読開く時やわ胴やれはわどゑ摘てとみやへる

あたひ芋の中子ましら引晒ち旅にまいる里かどんしゆ袴

里か庭はなやものもいやぬはかり唐土大和うち向て笑てさきゆさ

最早おすかせもうれしこときくの花に音信のほひ立さ

夜の明て日やあからはんよたしや巳午のとき迄やわ手間さらめ

慶良間はひならて石火矢とゝめかちひき舟や跡に那覇の湊

いないまひんでちや夢やちやうもむたぬ御願引合にいなやまうちやさ

匂ひそたるむかしわすらゝねはへる花やちり落て紅葉なても

隠れ木の下にかくれ遊ふんて見かねある里に見付されて

庭のくほかすに馬やつなくとも二又掛け里に御肝呉るな

1350 * 1348 1347 1345 1344 1341 1338 1337 1336 1334 1333 1332 1331 1329 1325 1322 1318

1349

苦しやしゆて啼けはなきゆんでといふるい涙も押のこて笑て見しら

只にゑちやうもわ身やおさんかけられすたかしちやかわ門に手巾かけて
あんくわたやよかていな夫もちゆいわみやなま童へ酒ともてある

わ山原習ひの田畠しゆる外にのゝおめのあゆか首里の主の前
入相のかねの音の身にせめてきくもつれなさやけふもくれて

てんしやこの花をややこんしやうれをやものもひく花こ花里かをやもの
はなもたんでやりわぬふしきおもなたへ花やてともてやんきやる

伊平屋(の)あんかなし童へあんかなしいきやし七離御掛めしやいか
諸見や首里御国仲里や田舎いなか山国や花やさかね

遊ひ諸見仲田花や真勢理客仲里のこしと御行逢し所

安波のまはんたや肝そかり所宇久のまつしたやねなしところ

安富祖竹きやい志良垣やゝねて金武久葉よとやひよはた恩納

きんすきしむちやれたけとにいとおちやてたし縫しやる人と御上手やたら

間切てつやれはけさ拝てすてる間切わかされてなまとをかむ

首里天かなし自由に拝まれ按司かなし拝てをかたこたうさ

首里と山原や地つるちとやゆるこかとんてめしやうな首里の主の前

押風もすたしやてかやう押列てあしやけ庭に出て経よかけて

玉金里かあかひす羽美衣やけふのよかる日に経よかけて

895 894 893 892 891 890 889 888 887 886 885 884 883 882 881 880 879 878

小祿按司朝恒

小橋川筑登之

同人

□野湾王子朝祥

瑞慶覧昌綱

大工廻親雲上安祥

同人

美里王子

恩納なへ

神村親方

尚穆王

里か美衣たいもの浅地しちなよめからす若羽のことにそめれ
 たか宿かやゆら月の夜のよすかひくや三味線の音のしほらしや
 天のねにとひゆるわしのこまたかも野原すむ鳥におりてそゆさ
 那覇の嶋をてもなれし親兄弟の倂と立る朝も夕さも
 いきやし暮されか花の島んちゆのかにもさひしさる田舎をとて
 菊の露そやい千年へる童へ玉の盃にかけのうつて
 おきゆきゆけはなよめさけとけはなよめ里かもてなしとわ胴やもちゆる
 色々の花に心ひかされすもとかしやゝするなひとの心
 月と日の光隠そ雲霧や吹払てたはうれ空の美風
 □ねへたやよかてこのくしち遊てわすたよになれは御留されて
 詠めゆる内に倂や残ち山の端にいゆる月のおしさ
 仲島の小堀浮草やひかな浦のたて草やたかすひきやか
 琴の□もかすかてる月の影もすみてふく笛の音のしほらしや
 めつらしいものやあらぬあやへすか音信よ拝むしるしまてに
 波風もたゝぬてる月の影にうかふ釣舟のなたる清さ
 山蔭のやとりしる人やをらぬこゝろなくさめる花の色香
 人のし情に深山忘れたためゆるすはん飛ぬか籠の鳥や
 肝急き歩め頓て日も暮るあかとほる／＼といきゆる道や

1499 1496 1495 1494 1492 1488 1487 1486 1483 1482 1480 1479 1478 1477 1476 1474 1473 1472

- 913 漢那庸森
 912 安仁屋親雲上
 911 瑞慶覽朝紀
 910 恩叔和尚
 909 脱身和尚
 908 同人
 907 仲尾次憲註
 906 伊是名親方
 905 関勇助
 904 諏訪木工右衛門
 903 兼本
 902 与儀筑登之朝昌
 901 同人
 900 同人
 899 同人
 898 同人
 897 同人
 896 同人

月のてることに光りある人の曇りなひぬかけや世々のかゝみ
 たるにてやりともて可惜花おきやか深さある情け色にみして
 秋毎に弟きやけふのこと揃て互に詠めらや庭の小菊

誰にひかされて女あてなしのこかとなの浮繩とまひて着か

こかねたてまつん呉る人のをてもひかされてなれる我身やあらぬ
 願の雨はやくふり下ちたはうれいろそひてさかる嶋や国も

いのちより増て惜しさあるものや見果らぬ夢のさめていきゆす
 振捨ていかは情けなひぬものと思なしゆら人のよしやしらぬ

もの□^またてことや田舎てといやへる首里よりも増□^ま御寺わらへ
 白紙に深く墨の色染て別れても結ふ文の御縁

よしあしやしらぬ歌数や百首夢の間のうきよむちやるしるし

むかしことんてといはなしもきちやるふたかちやの美代も廻りつちやさ
 与所の上とやすか聞はなつかしや生期つらさ身に暮そとめは

さひしさに任ちしらぬ歌すれは与所の物笑のわ伽なゆさ
 此世人間や早晚もかにさらめ残る人ならぬ市の夕暮

□^知人の外にかたらゝぬものや心なくさめる酒のあまみ
 よる年のもとち若くなられよめ只遊ひめしやうれ夢のうきよ

首里まうらはたんで思童へつかて宿に音信やしらちたはうれ

931 同人
 930 同人
 929 同人
 928 渡久山政口
 927 同人
 926 山里筑親雲上
 925 同人
 924 同人
 923 同人
 922 同人
 921 同人
 920 同人
 919 同人
 918 同人
 917 同人
 916 同人
 915 同人
 914 同人

歌と三味線もなゆるわ胴やれは名残思事ものすてしゆすか
 うちよする浪も吹過る風もあまりうらめゆる音声はかり
 見れはおへちやしゆさ昔此宿に静かたのしたる人のこゝろ
 馴ぬ与所鳴やすゝき葉のかけも打招くかたとたのみほしやの
 難面さやうきよ雨やふらぬすか上下も共に袖よぬらち
 いつも此浦や泊てどいふすか留てとめらゝぬ恋の小舟
 雨もふり詰れ風も吹詰れ我身も声立てなかんし口もの
 蘭よりもかはしや錦より清さたとる方なひらぬ義理のまこと
 死出か山道に待兼らとめはいけ残る我身ともゝらみゆる
 野辺のあはら屋に月漏ちおても肝や十尋屋の金の座敷
 仮の此世界の夢もいなさめてなまと極楽の道にいゆる
 あたし野にいけは帰る人やをらぬ草の葉の露と行衛さらめ
 思童へすかちなまと思しゆるむかしわぬもたるひとのなさけ
 かきて奥山にさく花やあらぬもてなしのあれはは山やても
 首里天かなし御恵の露に染るうれしさや民の草口
 蘭の匂ひ立る花の御座敷やならそ四つ竹の音のしほらしや
 あん小たか歌にわらんきやか踊りほふれきゝふりににや夜や明ち
 むねの浮雲も払て有明の月のことさやかてらちみほしや

1540 1539 1538 1537 1536 1535 1534 1533 1532 1531 1530 1529 1528 1527 1526 1525 1524 1523

- 949 同人 いきやしかな親の心慰て□□し顔朝夕拌みほしやの
- 948 同人 遊ひゆたる童へいなおとななる花の面顔もみしりかねて
- 947 護得久朝置 あかつちの別れしらす鳥やは振合の夜もかたて呉らな
- 946 松山尚順 聞はうれしさを原の人々の世果報いさなゆる晩のうた声
- 945 同人 只しはしたいんすまとろめもすれはなれし古里もみゆらやすか
- 944 同人 是迄□ともてあさむくな浮世山ひくかねのならぬかきり
- 943 今帰仁王子朝敷 そたる夜のむかし尋ねやい見れはさめてあかつきの夢の心地
- 942 野村里親雲上安趙 なれしことの葉の音信よたいんす聞は慰になゆらやすか
- 941 同人 向ていこと葉やいかほとにいやはんうしろそしるなやうたるになても
- 940 川平親方朝範 朝夕わか願ひやしめて子は孫のいきゝゆる外に肝やなひさめ
- 939 同人 時さらめ世話のかゝる難面さも浮世慣しと忍て暮そ
- 938 真謝孝覽 風頼て渡る浮舟の習や心真帆ひきも自由もならぬ
- 937 大宜見親方 君の御恵や雨露のこと□□四方(に)ふひ残そかたやなひらぬ
- 936 尚泰王 浮縄先いかはうれし音信や佳例吉の宿にかたて□かき
- 935 尚育王 にしきうち重ねいまひる日と我身や朝夕肝のくわん御待しやへる
- 934 仲村良常 いちゆなしやかされら此頃や弟きや声の音信もなひらぬあすか
- 933 同人 今年行ち八重山あけてくやう沖縄結である縁の糸の上から
- 932 同人 出立るそてに佳例吉はつゝて旅のいきもとり誇ていまうれ

1558 1557 1556 1555 1554 * 1553 1552 1551 1550 1549 1548 1547 1546 1545 1544 * 1542 1541

967 同人
 966 同人
 965 同人
 964 同人
 963 同人
 962 同人
 961 同人
 960 同人
 959 同人
 958 同人
 957 同人
 956 同人
 955 同人
 954 同人
 953
 952 同人
 951 同人
 950 同人

かにくれしやあるい哀思無蔵か別れ路の袖にすかてなけは
 忘てわすらゝぬとしの面影や東り立雲にいつものこて

浮世あかゝらそ文や御万人の肝のもてなしも清くなゆら

もたそ芭蕉の実なひのなることに君かひるがひもあにすあらな

八十□□の祝ひの佛も引寄て見ゆさ今日の座敷

ひよくをし鳥のちきりしちけふや万代にさかるはしめさらめ

孫の真実や杖につきめしやうちもゝの坂迄も登ていまいれ

いつも此宿や子孫揃て世々につまましゆるよねのまつん

いつか又もとの美代になて人の世話のまし垣もしのち行ら

すみ捨て美代に出て詠めらな光りすみわたる夜半の御月

御願ひ事済ちはたひ(か)ちいまうれやまと口いらは御迎しやへら

なからへてをれはむかし繰もとち又も仲島の花の遊ひ

むね内の玉の光なひぬ置めたとひ世の中や暗くなても

浮世渡り路もわすられていまひめ御行逢拜むことのまれになとす

ころされもすらぬわか身世中に袖ふゆる節もいなになため

たんかなて花のきんくすてむちやれよかてさめ鶴や千代のすかた

年(も)立帰て初春になれは朝夕よろこひのこゝろはかり

佳例吉ようたてわか会釈しゆもの早くきゝいまうれ大和にしき

1576 1575 1574 * 1572 1571 * 1569 1568 1567 1566 1565 1564 1563 1562 1561 1560 1559
 1573 1570

985 同人
 984 同人
 983 同人
 982 同人
 981 同人
 980 同人
 979 同人
 978 同人
 977 同人
 976 同人
 975 渡嘉敷通睦
 974 同人
 973 同人
 972 同人
 971 同人
 970 同人
 969 護得久朝常
 968 又吉全道

御掛ほさへ美代やうれしこときくの花も世誇のいろよふくて

月の夜になればかはて覚出しゆきなれし古里の遊ひ所

いかな世話事も吞は忘れゆい汲かわそ酒といのちさらめ

ふゆる雪霜も与所になちかたる埋火のもとや春の心地

かきあさひ／＼埋火よ起ちあられふる夜や明しかねて

大庫理のすたれまき上れ童へ世かほしにゆくゆる雪のふゆさ

たるもゝ年のうきよさめ人やのよて月花よ与所になしゆか

浮世かたわれのふねに棹さして闇にこき渡る浪路こゝろ

互にむね内の誠うち開きかたるい言葉や蘭のほひ

かなし子や孫のおとなほしやしちをてなどのよる年も与所になしゆさ

誠積わたる浮世こくふねにのよて化浪の繁くたちゆか

うしろ指さゝれもの笑になても誠一筋のはちやかゝぬ

蘭の花忍て忘れたさむかしあかぬなかめたる梅のほひ

親のうきつらさしらなあてなしのすてゝ先なため死出か山路

□てわすらゝぬいちも尽さらぬわか身助けたるひとの情け

そしる人の肝のよしあしよむちとそしられる人の実やしゆる

□理頼てわたる浮世慣しやわと(や)ちやうもわとのまゝやならぬ

わか誠尽ち与所の為すれば与所ためもなとのためとなゆる

1594 * 1593 1592 1591 1590 1589 1588 1587 1586 1585 1584 1583 1582 1581 * 1580 1579 1578 1577

986	同人	いけやういかいんていちと出たすかなれし俵のうしろひきゆさ
987	当間親雲上朝宜	我身ものほやかないらんてとしゆたるとまひてきやめ童へみほしやあたさ
988	崎浜親雲上	する墨になたの玉ちりていれは書なかそ筆の先も見らぬ
989	大宜見按司朝春	し情の余り深さある故と短気みしきやさも繁くなゆる
990	同人	又拝む事もしりなけなわみのいきやしかな今宵別れくれしや
991	同人	こゝろある人のいことはの花やらんの匂ひよりも増てたちゆさ
992	備瀬筑親雲上	日々に改ためてみかきとんすれば光りなひぬ置めむねのかゝみ
993	大里朝要	わか山の内にすみわたる月のかげに覚出しゆさ花のみやこ
994	新城安規	拝てうれしきやわ肝はれ／＼とか籠よ飛立る鳥のこゝろ
995	同人	存命てをれば闇の世中も繰戻ち仰く美代のかゝみ
996	小那霸朝亮	聞は面白さ心ある人の朝夕文の声や山にひゞき
997	伊波筑親雲上	いきたらぬわ身や見捨よめ弟きやいねけ赤羽の袖合わすて
998	座間味盛令	存命てをれば袖ふゆる節もめくるさめともて忍てくらそ
999	同人	のかすわかむねやせめかこもあらぬ余りとくうちゆる世話のしもく
1000	宜寿次里親雲上	言遣りしち呉れやう袖合たるとしに音信もきかぬ沙汰よしゆんて
1001	同人	時よ見ち下る空にとふ鳥の頓てすみなしゆら庭の樹
1002	高宮城親方	人のし情 <small>②</small> 誠から出るいことはの花や蘭のにほひ
1003	多嘉良朝正	わぬかなしやあらは御胸かなしくやわぬよりも増て思てたはふれ

1595 1596 1597 1598 1599 * 1600 1601 1602 1603 * 1604 1605 1606 1607 1608 1609 1610 1611 1612

1021 知念里親雲上
 1020 富盛按司
 1019 祖慶筑親雲上
 1018 伊是名朝直
 1017 同人
 1016 佐久本嗣順
 1015 池城親雲上
 1014 大宜見朝昆
 1013 湧川親雲上
 1012 森田筑親雲上
 1011 伊江朝永
 1010 具志堅里親雲上
 1009 真栄城筑登之
 1008 兼村筑親雲上
 1007 同人
 1006 浜元親雲上
 1005 親泊筑親雲上
 1004 同人

真北押風やわかいやりともれ真南風や無蔵か言遣りともら
 かたて面白さ隙のあて互に寄合て遊はなやとしやよたひ
 世界にてり渡る御日御月たいんす隠そ村雲のあるよたいもの
 年よ繰戻そみちやなひぬあれはこゝろいさみとてもゝきのはな
 松の下かけやすたしやあんともて露にぬれめしやうな旅の空や
 つゝまらぬものや花の匂ひさらめ七重ませ内に隠ちあても
 首里かなし美公事済ち九月や佳例吉の美御胸拝てすてら
 明雲と列て飛立るはへる向ていくこゝろ与所のしゆめ
 朝夕寄ことや与所の上もむちゆて老のい言葉のあまりともな
 うきくれしや／＼重ねてと我身や明暮も空に向てなきゆる
 いねけ赤羽の袖合故さらめ隠れとる宿に忍ていまひす
 かにも難面さめ与所島にをれは住なれしやとの音もきかぬ
 見れはうれしさを向てきゆる年の世かほしのくゆる雪の真米
 楽も苦もうち過し／＼このちやなてをすや夢の心地
 又もかたらゆる節もあめ二人此世ふりすてゝいかぬ内に
 御恵の露にかはて御茶園や滴とてもしける千代のみとり
 てる月の外に与所のたかしゆか山にあとかくそひとの行衛
 山の奥迄も人のあとゝまひてこゝろあててらそ月の清さ

1630 1629 1628 1627 1626 1625 1624 1623 * 1622 1621 1620 1619 1618 1617 1616 1615 1614 1613

1039 同人
 1038 金武朝芳
 1037 同人
 1036 同人
 1035 同人
 1034 護徳久朝良
 1033 同人
 1032 小那覇朝親
 1031 伊江朝常
 1030 同人
 1029 摩文仁朝位
 1028 同人
 1027 上江洲由恕
 1026 田崎朝用
 1025 同人
 1024 同人
 1023 上江洲由具
 1022 大宜見朝知

顔や奥山の朽木なてをても肝や初春の花のにはひ
 おみちやけもすらぬ拝てうれしさの覚らすに美衣の袖とたる
 かにある苦ももゝ忍ひしので日々のいとなみもすらなゝゆめ
 かたふちゆる月に千鳥なく声や哀さま／＼のおもひましゆさ
 落るみなかみの果やしらねともうきよ轟きの音のたかさ
 尋ねればむかしよしやしら骨のさらそもゝちやなや百のあはれ
 きくもさひしさや冬の夜の空の月に鳴渡る浦のちとり
 のやい遊ぶたる竹馬のむかしおとなゝてなまや夢のこゝち
 さやかてる月にたる呼び鳴かこひし渡地の浦の千鳥
 御万人の間切こゝろうち開け首里かなし御為なゆらたいもの
 蚊遣り火の煙りねやに立みちてあるちをられらぬ共に出て
 深山すむ人も御恵になひき誠世に出る美代になたさ
 おみちやけもすらぬ又拝むけふやうれしや名残しやのわ肝せめて
 今年御登やいつよりもまさてうれしことはかりみつとめしやうち
 わひ住のやとのあくた火や夏の蚊んおひのける便りなたさ
 松の葉よ燃ち蚊んのけよんで覚らすに我身も出てむちやさ
 夕間暮や替てこゝてるさあもの忍てまうれ互にかたて遊は
 おまぬもの思てまとるめもすらぬ哀待兼る鳥のはつ声

1649 1648 1647 1646 * 1645 1644 1643 1642 1641 1640 1639 1638 1637 1636 1635 1634 1633 1632

1056 同人
1055 護得久朝惟
1054 西原里之子
1053 同人
1052 同人
1051 同人
1050 同人
1049 同人
1048 同人
1047 同人
1046 同人
1045 同人
1044 同人
1043 同人
1042 同人
1041 同人
1040 同人

七歳の時詠歌

夏の真昼間やかん暑さあものすた所とまひて遊びほしやの

庭の松の葉にさはく夜嵐の音もしつめよる琴のしらへ

四方にてり渡る美代の御光にさそはれて出る山の住家

すかた引替ちこのなひになてものよて君親のみこしひきゆか
まとろめは夢のよひ起し／＼一人ねのよひや明しくれしや
情けあて今宵しはし待めしやうれなれぬ旅宿のつらさかたら
あかと西原にいとなみよすらは日々音信もまれになゆら
若さたるかけて遊て暮そなやうひきも留らゝぬ月日たいもの
道急く人も立ゆとて聞ら軒のつれかね(の)千代のひゝき
もてなちやる菊の花よりも増て君かことのはの匂ひのしほらしや
いつからかわ身のしゆる世話もゆるちこゝろやす／＼と年もとゆら
名に立る今宵一人をられゆめいまうちわか宿に月見されゝ
人のもたちくひたる芋酒のあすかけふや主したり前隙やあらね
使て呉てかほしいやさんてとしゆたるくなひたから我身も見ほしやあたさ
かれよしの御状とわないまちやひをたるいまいまうちいまひす夢も見たさ
なれぬ与所島やこゝてるさあものひま／＼やいまうち語てたはうれ
鳴や白雲の押隠ちをすかのよて面影の手取てひきゆか

1666 1665 * 1664 1663 1662 1661 1660 1659 1658 1657 1656 1655 1654 1653 1652 1651 1650